

柏崎市の遺跡III

—柏崎市における各種開発に伴う試掘・確認調査の報告—

1994

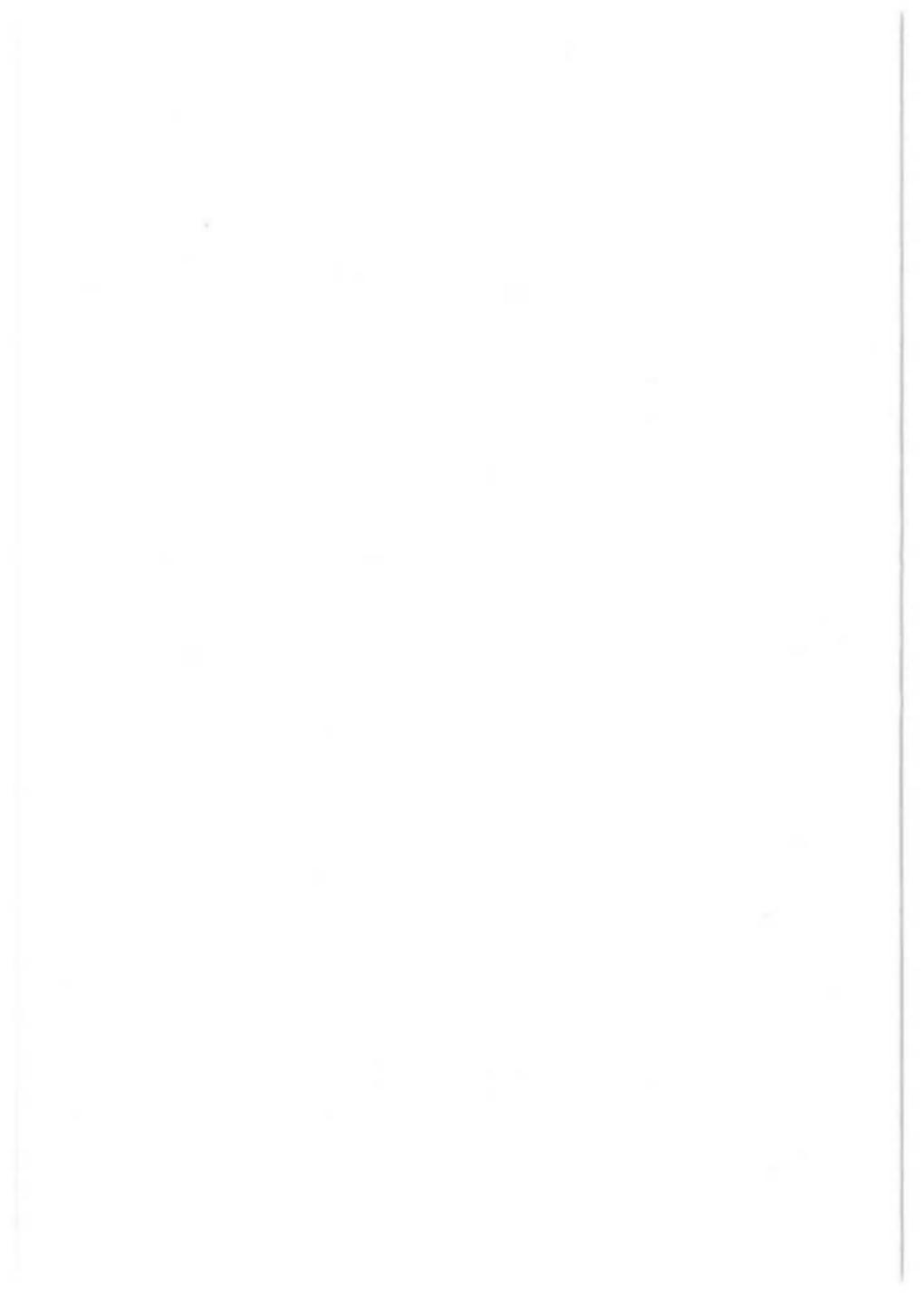
柏崎市教育委員会

柏崎市の遺跡Ⅲ

—柏崎市における各種開発に伴う試掘・確認調査の報告—

1994

柏崎市教育委員会



序

現在、柏崎市の遺跡は、およそ340件670遺跡ほどが確認されています。新潟県全体では約11,000遺跡の登録がありますが、これに占める割合は約6.1%、県内112市町村の平均より7倍近い遺跡が市内に発見されていることになります。この数字は、本市における遺跡密度の濃さをよく表わしています。

ところで、多くの遺跡が市内各所に所在することは、実は遺跡がそれだけ身近な存在であるとすることができます。今の生活は、多くの文明機器などに囲まれ、便利な営みを続けています。しかし、これらを取り除いたとき、過去の文化とどれほど違うのであるのでしょうか。文明に浸された自然に魅力がないように、機械文明等に埋もれた生活中に、本当の豊かさを見出すことができるのでしょうか。遺跡を残した人々の名は、今はほとんど知ることはできません。遺跡は、無名の人が残した過去の痕跡ですが、その地域に生活をした人々の文化を伝えるほぼ唯一の物証です。遺跡を理解すること、それは私たちの書かれなかった歴史を知ることになります。私たちの生活が、過去の歴史の延長線上にあることは確かであり、未来を正しく見つめるため、自分たちの歴史を理解しておく必要があるでしょう。遺跡を大切にし、そして理解することは、私たちの未来を見つめるための一つの方法と言えるかも知れません。

柏崎市教育委員会では、開発に伴う事前調査として国・県の補助金を得て、柏崎市内遺跡発掘調査を実施しています。本年度は、第Ⅲ期調査として田塚山遺跡群と青海川東部丘陵の一画を調査しました。本事業は、試掘あるいは確認調査を目的としているため、遺跡全体を把握するには小規模な調査です。しかし、わずかに得られた情報でも、遺跡の実態や地区の歴史を探る貴重なデーターに違いありません。ささやかではありますが、この報告書が地域の歴史理解の一助となり、また遺跡保護のため活用されるとすれば幸いです。

最後に、調査に参加された調査員各位、本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会、ならびに調査にご協力いただいた事業者及び工事関係者に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成6年3月

柏崎市教育委員会

教育長 渡辺恒弘

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市内における各種開発に伴い実施した試掘・確認調査の記録である。本事業は、「柏崎市内遺跡発掘調査」を事業名とし、平成3年度を初年度に継続して実施している。平成5年度は、第3年次の第Ⅲ期調査であることから、本書名を『柏崎市の遺跡Ⅲ』とした。
2. 調査は、柏崎市教育委員会が主体となり、国・県の補助金を得て実施した。
3. 第Ⅲ期調査の対象遺跡は、両田尻・茨日・藤井の3地区にまたがる田塚山遺跡群と青海川地区東部丘陵地内（ワカサレ・ツキノキ地内）の2地点である。
4. 確認調査の現場作業は、田塚山遺跡群においては社会教育課内遺跡調査室のスタッフにより調査を実施、また青海川東部丘陵地区については県教委から調査担当の派遣を得て社会教育課職員が調査に従事した。これらの調査現場作業においては、開発の事業主体者及び工事関係者の協力があつた。整理・報告書作成作業は、調査担当・調査員を中心として遺跡調査室のスタッフにより実施した。
5. 確認調査で出土した遺物及び調査・整理の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（社会教育課遺跡調査室）が保存・管理している。なお、遺物の往記は、田塚山遺跡群では「タフカ山」を表記し、これに地区名・トレンチ名および遺構名を付記した。なお、青海川東部丘陵地区については、調査による遺物の出土はなかった。
6. 本報告書の執筆は、調査担当・調査員等で分担執筆とし、また編集も共同で行った。

第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章 晶田高志

第Ⅱ章第3節・第4節・第5節 中野純

第Ⅱ章第1節・第2節・第3節・写真図版 小山田夕実

7. 作成した挿図等の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

8. 確認調査から本書の作成まで、下記の方々から多大な御教示・御協力及び御指導を賜わった。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

赤井純治・石坂圭介・佐藤雅一・田中耕作・寺崎裕助・徳間正一・長澤展生・萩野しげ子・三井田忠明・渡辺勇・新潟県教育庁文化行政課・柏崎市立博物館・柏崎市経済部地域振興室・高頭不動産㈱・柳原木組

調　　査　　体　　制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 渡辺恒弘

總　括 西川辰二（社会教育課長）

管　理 川又昌延（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱い）

飯塚純一（社会教育課副事務官兼社会教育係長事務取扱い）

庶　務 佐藤正志（社会教育課社会教育係主査）

調査担当 高橋保（新潟県教育庁文化行政課主任）〔青海川東部丘陵地区〕

品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）〔田塚山遺跡群〕

調　　査　　員 中野純（社会教育課文化振興係主事）

小山田夕実（社会教育課文化振興係学芸員）

渡辺富夫（社会教育課嘱託）

帆刈敏子（社会教育課嘱託）

思崎和子（遺跡調査室）

整理作業 堀幸子・岩下清美

目 次

I 序 説	1
1 柏崎市における埋蔵文化財調査の現状と課題	1
2 平成5年度事業の概要	2
3 遺跡の位置と環境	2
II 田塚山遺跡群	4
1 調査に至る経緯	4
2 調査の経過	4
3 試掘調査の概要	5
(1) 遺跡群の概要	5
(2) A地区の遺構と遺物	7
(3) B地区の遺構と遺物	8
(4) C地区の遺構と遺物	11
(5) D地区の遺構と遺物	13
(6) E地区の遺構と遺物	14
(7) F・G・H地区の概要	17
4 繩文時代と田塚山遺跡群	18
5 田塚山遺跡群B地区SK-5出土の異形土器について	19
III 青海川東部丘陵地区	26
1 調査に至る経緯	26
2 試掘調査の概要と調査結果	27
3 古代の青海川地区	29
IV 総 括	34
引用・参考文献	34
報告書抄録	卷末

図版目次

- 図版1 田塚山遺跡群1 a～d, A地区 e～h, B地区
図版2 田塚山遺跡群2 a, 土器出土状況 b・c, 遺構内の土器 d・e, 遺構
図版3 田塚山遺跡群3 a～d, C. 地区 e～h, D地区
図版4 田塚山遺跡群4 a～d, E. 地区 e・f, F地区 g・h, G地区
図版5 田塚山遺跡群5 出土遺物
図版6 田塚山遺跡群6 出土遺物
図版7 青海川東部丘陵1 a, 調査区近景 b～e, 調査トレンチ
図版8 青海川東部丘陵2 a～d, 調査トレンチ

挿図目次

第1章 序 説

- 第1図 柏崎平野南西部と遺跡の位置 / 3
第Ⅱ章 田塚山遺跡群
第2図 トレンチ配置図 / 6
第3図 A地区遺構分布図 / 7
第4図 B地区遺構分布図 / 9
第5図 B地区出土遺物 / 10
第6図 C地区出土遺物 / 11
第7図 C地区遺構分布図 / 12
第8図 D地区遺構分布図 / 13
第9図 E地区遺構分布図 / 15
第10図 E地区出土遺物(1) / 15
第11図 E地区出土遺物(2) / 16
第12図 F地区出土遺物 / 17
第13図 B地区SK-5平面・断面図 / 19
第14図 B地区SK-5出土土器(1) / 20
第15図 B地区SK-5出土土器(2) / 21
第16図 B地区SK-5出土土器
炭化物・二次焼成範囲 / 23
第17図 縄文時代中期末葉～後期初頭
の凸縞文施文土器群 / 25
第Ⅲ章 青海川東部丘陵
第18図 (仮称)柏崎コレクションビレッジ
建設用地内の地形と隣接遺跡 / 26・27
第19図 事業計画とトレンチの位置 / 28
第20図 青海川地区概要図 / 32

表 目 次

- 第1表 青海川本村・新田土地所有者対比表 / 30
第2表 青海川地区小字対比表 / 31

I 序 説

1 柏崎市における埋蔵文化財調査の現状と課題

柏崎市域における諸開発は、その事業主体から区分すれば、公共事業・準公共事業・民間開発の大きく3類型に分けることができる。公共事業と民間開発が相変わらず多いが、最近の社会情勢を反映して両者の中間的な準公共的事業が目立つ傾向が窺われるようである。

さて、柏崎市で実施してきたこれまでの埋蔵文化財調査は、その主体が民間開発であったことから、民間開発相互の調整によって実際の調査計画を組むことができた。しかし、公共事業やそれに準じた大規模開発に伴う埋蔵文化財調査の増加は、従来の状況を一変させている。つまり、公共性が高いが故に民間開発に先行して調査をせざるを得ない傾向が見受けられるのである。しかし、民間開発も、公共事業等と同様に市域のより良き発展を意図している。公共性の強弱という問題も、実は相対的であって、両者のどちらかが停滞しても、結果として市域の発展を阻害することは言うまでもない。当市の埋蔵文化財調査は、両者のバランスを考慮して実施せざるを得ない状況となっているのである。

ところで、埋蔵文化財調査の計画あるいは実施に際し、これらが円滑に進められない事例が多くなっていることも最近の実情である。これには、開発事業サイドにおける埋蔵文化財への取り組み、あるいは理解の仕方等に、幾つかの問題点が指摘できる。その第一は、開発直前にあってから遺跡の取扱い協議が始まる事例が多いことであり、第二は調査に要する時間（期間）の事業工程からの欠落という点である。これらはともに、遺跡の実情や遺跡調査の現状に対する認識不足を原因としている。工事の着手と調査の着手が同時では、工事日程に支障が出てくるのも当然であり、調査体制を整えることが困難であれば、早急な対応ができない場合が多いからである。やはり、開発の計画段階に周知の遺跡の有無を確認するなど事前の情報収集と取扱い協議を早めにもつことが必要であり、発掘調査期間を事業工程に組み入れたり、あるいは資金調達の手順などの配慮が必要となってくるのではないだろうか。

遺跡に対する理解不足等は、遺跡を身近に感じる機会がないことが一因かもしれない。また、遺跡は大切と思いながらも、開発区域内に遺跡が存在すれば、発掘調査だけは避けて通りたいとの心理が作用するのかも知れない。しかし、遺跡はその地域にあって大小の差なく一つひとつが歴史的な遺産であり、現在の社会を築いた文化の証である。自分たちの文化を、歴史を理解せずして、文化的に豊かな生活を目指すとしても、それは大地に根差した本当の文化の創造となり得るのであろうか。文化の証の一つとして、遺跡を理解し継承していくことが、整合性を持った新たな開発・文化の創造となるのではないだろうか。遺跡は、自然と同じく一度失われてしまえば、元に戻ることはない。遺跡の保護・保存を一つの足掛りとし、地域に根差した開発こそが、今後の文化財保護側と開発側の両者に課せられた大きな課題と考えたい。

2 平成5年度事業の概要

柏崎市内遺跡第Ⅲ期発掘調査とした平成5年度の事業は、当初計画で3カ所を予定して事業に着手した。しかし、4月の田塚山遺跡群の試掘調査後に、1遺跡が事業の中止により、また1地区が用地買収等の遅れなどに伴い、調査も次年度以降へ延期されることになった。さらに、10月に至ると、遺跡隣接地での工事計画が進められていることが明らかとなり、急きょ試掘調査を実施した。以上の経過を経て、本年度における本事業は、1遺跡群と1地区的2件に対しての調査となった。

今回の調査は、例年同様本発掘調査の合間を縫って実施され、あるいはそれと併行して調査をせざるを得ないなど、日程的には厳しい状況下での事業となった。田塚山遺跡群の試掘調査は、4月半ばに実施したが、4月の後半からは別に本調査を控えていたことから、調査期間を1週間に限定しての調査となった。調査期間の不足は、その後補足調査を実施して補ったが、日程調整の困難さが端的に現れた調査であった。青海川東部丘陵地区の試掘調査は、(仮称)柏崎コレクションビレッジ建設のための造成工事に伴う試掘調査であった。調査は10月に実施したが、一部工事中の箇所もあって、調査を実施する条件は良くなかった。また、この試掘調査時、別地区において大規模開発に伴う発掘調査を実施中であり、調査担当等の人員が手配できず、県教委主導による調査となった。

3 遺跡の位置と環境

柏崎平野概観 新潟県の中央西部に位置する柏崎平野は、鰐石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。この二大河川は、個々に独立した水系をなし、また信濃川水系と関川水系とは丘陵・山塊による分水嶺で隔され、独立平野を形成したものである。

柏崎平野を取り巻くのは、東頸城丘陵の一部である。地形的には、米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とし、鶴川・鰐石川によって3分されている。東部は、北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長島川といった鰐石川の支流が南西に流れ出る。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する北端部には広い中位段丘を形成する。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊が広がり、海岸まで張り出している。沿岸部では、低位・中位・高位の段丘形成が顕著で、砂浜はほとんど見られない。沖積平野の北西正面は、日本海に洗われるが、海岸線に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわり、柏崎の現市街地が広がっている。沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、また河川による自然堤防の形成も著しくなっている。

田塚山遺跡群 本遺跡群は、沖積地の中央に浮かぶ600m四方ほどの独立した小丘一帯に広がる。この一帯には、大小の小丘が多いが、田塚山はその中でも最大規模であり、当該地域においては重要な山林であった。これら小丘群は、柏崎平野中央部の丘陵北端に形成された中位段丘の一部である。鰐石川は、安田周辺で鰐石谷を抜けると、大きく蛇行する暴れ川となる。

沖積地の形状は、安田付近を要とした扇形で広がっており、鯖石川の侵食作用により中位段丘の多くが削られ、一部田塚山に代表される小丘として残っていたものである。本遺跡群の主要時期は、縄文前期末頃から後期前葉に至る。現在の鯖石川は、遺跡群から東へ1km余りのところを北流する。縄文時代当時の流路については不明であるが、田塚山の西側を通っても、それほどの距離ではなく、漁撈等の生業とはかなり深い関わりが想定できる。なお、隣接する小児石遺跡では、前期末の土器群とともに陥し穴が検出されている〔柏崎市教委1991〕。周囲を湿地性の沖積地で囲まれる当該地一帯でも、陥し穴獣の獲物は多かったことが類推できる。

青海川東丘陵地区 当該地区は、米山山塊が海岸に張り出した一画にあり、青海川台地と称される高位段丘内である。したがって、段丘上の平坦地は多いが沖積地等の低地は少ない。周間に確認される遺跡は、ダルマ岩製塗遺跡〔品田1989〕と倉谷遺跡〔品田1993〕で仮青海川遺跡とした鉄滓出土地点)であり、集落遺跡はいまだ未確認となっている。



第1図 柏崎平野南西部と遺跡の位置（1:100,000）

II 田塚山遺跡群

1 調査に至る経緯

田塚山の地形は、中位段丘に相当し、平坦な上面をもち、幾つかの沢に侵食されている。かつては田尻山を経て上田尻で南部丘陵に接続する尾根の一部であったが、鰐石川の侵食あるいは沖積作用により変化し、現在田塚山は柏崎平野最大の独立丘となっている。

当該地における宅地造成事業は4年ほど前からすでに計画され、開発に係る最終的な協議等は、国土利用計画法関係が平成4年4月20日付けで、また新潟県大規模開発対策要項第6条に係る事前協議は、平成4年7月16日付けでなされていた。この開発区内には、周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、隣接した地点に小児石遺跡が存在し、また当該区域に接して、塚状の遺構群が発見されている。これらの状況から、小児石遺跡に係わる中世墓地あるいは縄文集落といった未周知遺跡の存在が想定されていた。しかし埋蔵文化財に関する協議等は、上述の協議書における意見のみで、文化財保護サイドとの具体的な取扱い協議がなされていなかった。結局、正式な取扱い協議がなされたのは、平成5年3月9日であった。この協議にあたり、急きょ現地踏査を実施、その結果に基づき県教委と協議することになった。

現地踏査では遺物の散布等は確認されなかったが、地形等から8地区にわたって遺跡の存在する可能性が指摘された。県教委は、この結果から試掘等を実施するよう市教委に指示した。試掘調査の時期については、当初見通しがたてられなかつたが、他調査の合間に実施できるよう事業者と打合せを行つてゐた。そして平成5年4月12日から16日、及び同7月12日、同12月3日、同14日から16日までの延べ10日間、調査を行つたものである。

2 調査の経過

平成5年4月12日、調査担当・調査員等6名が現地に赴き、調査に着手した。調査の方法は、バック・ホウ(0.7m³)1台により、各地区に任意のトレーニチを設定し、遺構の有無あるいは遺物等の確認を行うというものであった。調査区はすでに伐採が済んでいたが、区内に置去りにされた木材や木根のため、予定通りにトレーニチを設定できないことが多かった。調査は4月12日から15日までトレーニチの発掘、遺構確認、一部遺構の発掘などを行つた。

平成5年7月12日、表土剥ぎが行われたC・D地区の遺構確認等を中心に行つた。急に決った1日のみの調査であったが、C地区では勾玉を包蔵する土壙等、D地区では土器片を伴うピット群等を検出することとなつた。

その後の補足調査は、平成5年12月3日、及び同14日から16日までB地区を対象に行つた。調査員2名で、天候の回復した時を狙つて、土壙の発掘、実測、写真撮影等を実施した。そして平成5年12月16日をもつて本遺跡群の試掘・確認調査は終了した。

3 試掘調査の概要

田塚山遺跡群は、地形からA～Hまでの8地区に区分される。今回の試掘調査における調査対象総面積は約12,000m²、実際の試掘調査面積は合計1,397.5m²で、比率は11.65%である。

(1) 遺跡群の概要

田塚山遺跡群は600m四方ほどの大規模な丘陵地に所在する。丘陵の上面は比較的広い平坦部である。隣接して塚状の遺構群が確認されているほか、南東方向の約95m先には、1990年に柏崎市教委によって調査された小児石遺跡〔柏崎市教委1991〕が存在する。

A地区は丘陵地最南端の平坦部に位置し、塚状遺構群に隣接する。試掘調査のトレンチは4本設定したが、平坦部だけでなく、中世墓地の存在を想定して斜面部にも設定した。落ち込みは、A-4トレンチで溝状遺構・土壙・倒木痕がそれぞれ1基検出された。遺物は皆無で、これらの遺構の所属時期は不明であるが、少なくとも縄文時代とするには疑問が多い。

B地区はA地区的北側に位置し、もっとも広い平坦面を有する。トレンチは平坦面を中心にして5本設定した。本地区は地形的に縄文遺跡の存在が想定され、複数の土壙・ピットなどが検出されたが、確実に縄文時代と確認できたのはB-4トレンチ内のSK-5のみであった。SK-5は、遺構内より出土した遺物から縄文時代後期初頭のものと考えられる。

C地区はB地区的北側に隣接し、丘陵のほぼ中央に位置する。当初から縄文遺跡の存在を想定し、トレンチは平坦部に5本設定した。検出された落ち込みは計6基であるが、そのうち2基は擾乱と木根痕であった。遺物はC-3トレンチから縄文時代中期初頭の土器が出土したほか、縄文土器3点が表採され、遺構内からは勾玉が検出された。勾玉は土器を伴わなかつたため時期不明であるが、少なくとも縄文時代のものと思われる。

D地区はC地区北西側の平坦部に位置する。同様に縄文遺跡が想定可能で、平坦部を中心にして5本のトレンチを設定した。試掘時には焼土遺構と木根痕が検出されたのみであったが、表土剥ぎ後の補足調査において、土器片を包藏するピット複数が確認された。

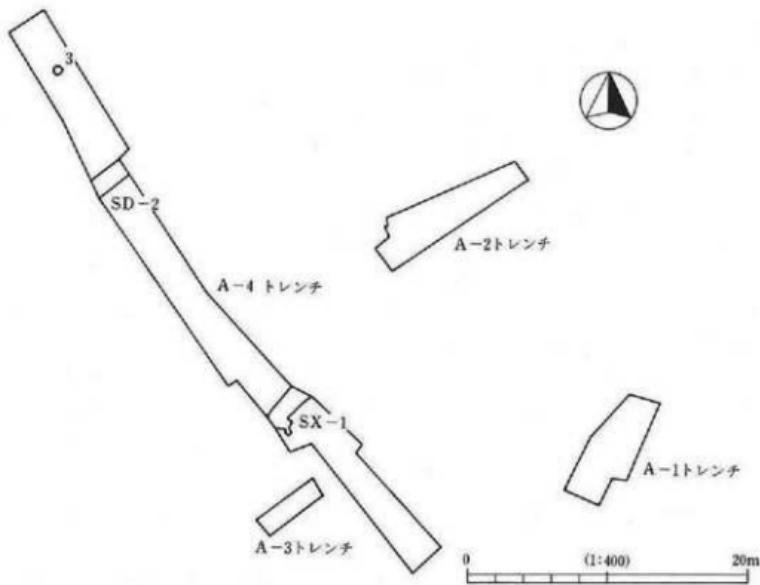
E地区は丘陵地西端に位置する平坦部を中心とする。トレンチ3本を設定し、E-1トレンチから複数の落ち込みが確認されたが、確実な遺構とは判断できなかった。縄文時代前期後半～中期初頭の土器片が出土したほか、近代の遺物も検出された。

F地区は丘陵地北東端に位置し、トレンチ4本を設定したが、木根痕と考えられる落ち込みが確認されたのみであった。遺物も近代のものが検出されたほかは、皆無であった。G地区は、D地区南側の沢内頭部に位置する。トレンチ2本を設定したが、遺構・遺物とともに確認することができなかった。H地区はG地区の南方、A・B地区の西方に位置する沖積地ではあるが、G地区で遺跡存在の可能性が認められなかつたことから、調査対象から除外した。

なお、今回の試掘調査の結果として、A～E地区は今後本調査の対象とし、F～H地区は立合調査を行うこととなった。



第2図 田塚山遺跡群トレンチ配置図



第3図 田塚山遺跡群A地区遺構分布図

(2) A地区的遺構と遺物

隣接して塚状遺構群が存在し、南東方向には小児石遺跡も存在することから、当初は中世墓地が想定されていた。そのため、当地区的斜面部にもトレンチを設定して、遺構の有無の確認を行った。調査対象面積約1,500m²、設定したトレンチはA-1～4の4本で、面積は計178.5m²、調査対象面積に対して11.9%を試掘調査した。

A-1～3トレンチでは落ち込みなどは認められなかったが、A-4トレンチからは溝状遺構が検出された。溝は幅約70cmで、尾根を断ち切るように横断していた。サブトレンチによる確認では深度約20cmと比較的浅く、壁は緩やかで、覆土は暗褐色を呈していた。所属時期は遺物が検出されなかったため不明であるが、少なくとも縄文時代のものとは考えられない。また、明褐色土を覆土とする土壇や倒木痕も同トレンチで確認された。土壇についても遺物が検出されなかったため時期不明である。木痕である可能性もあり、今後の本調査によって確認したい。A-3トレンチは、旧道西側が土壘状に盛り上がっていたことから、土層観察のため断ち割ったものである。観察の結果、畑などによる削平を受けなかった本来の自然堆積状況であり、部分的に旧地形をとどめているものであると判断された。なお、本地区からは遺物は検出されなかった。

(3) B地区の遺構と遺物

今回の調査対象区域内では、もっとも広い台地平坦面を有するため、当初から縄文集落の存在が想定されていた。調査対象面積は約3,000m²、設定したトレンチはB-1～7の7本で、計380.0m²を試掘調査した。調査対象面積に対する比率は12.7%である。

B-1・3・7トレンチからは落ち込みなどの遺構は認められなかった。B-2・5・6トレンチからは複数の土壌・ピットが確認されたが、その大半は遺物を伴わず、時期を確定することができなかった。検出された遺構の中で、所属時期が確定できたのはB-4トレンチのSK-5(第13図・図版2-a～e)のみで、出土した遺物から縄文時代後期初頭に位置付けられるものである。このSK-5は墓坑である可能性が考えられ、本地区から検出された複数の土壌・ピットは、SK-5の存在から集落に伴う柱穴などが含まれている可能性がある。しかし、遺構の分布密度は比較的希薄であると思われ、遺物もB-4トレンチから1点表採されたほかはSK-5以外からの出土が認められず、縄文集落の存在が想定されつつも不明な点が多い。なお、B-2トレンチからは焼土遺構が検出されたが、表土からの掘り込みが確認され、新しい時代のものと思われる。

本地区の出土遺物は、1点がB-4トレンチから表採されたもので、残りすべてはSK-5からの出土である。

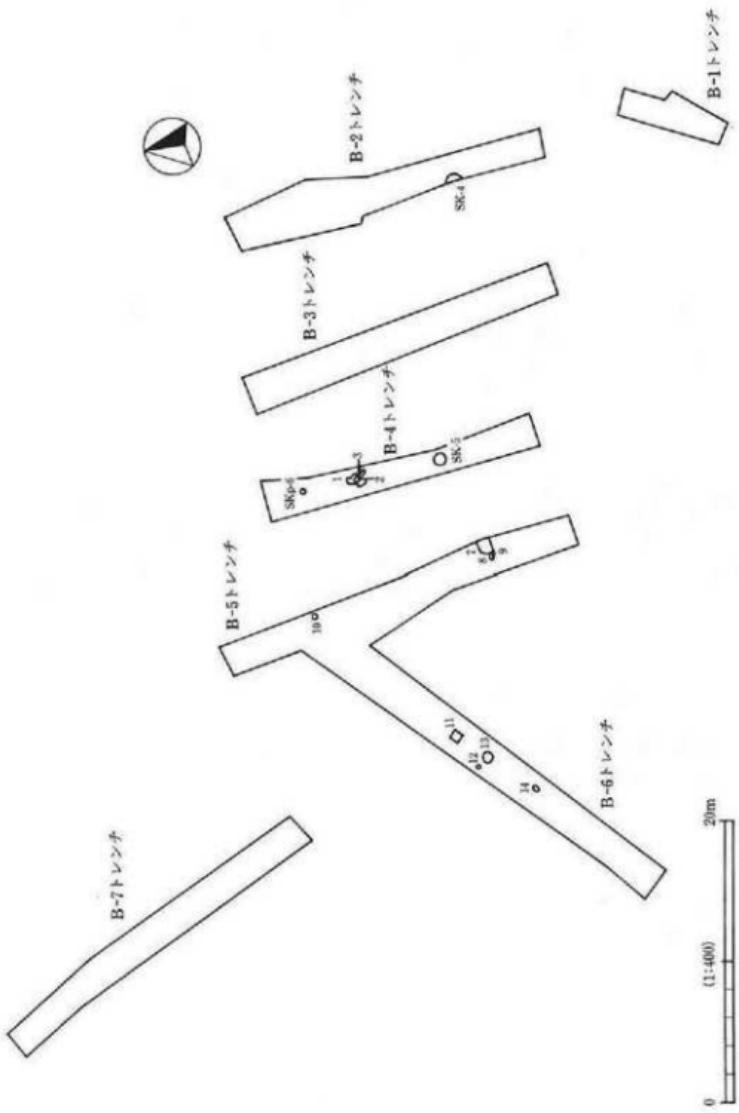
第5図-1はB-4トレンチ表採の口縁部資料で、頸部に太い調整隆帯が施される土器である。概ね縄文時代中期後葉～後期前葉に比定されるものである。

第14～15図は、SK-5の確認面において出土が認められた資料で、口縁部の片側がそのまま上方に伸びてドーム状に被る異形の土器である。ドーム状部分には比較的大形の凸縄文が一面に施されており、その配列はランダムである。また、通常の深鉢における口縁に相当する部位から底部にかけては、縦位の撚糸文(R)が地文として施されている。底部は検出されず、人為的に抜かれた可能性が高い。この資料は後期初頭のものと考えられる。

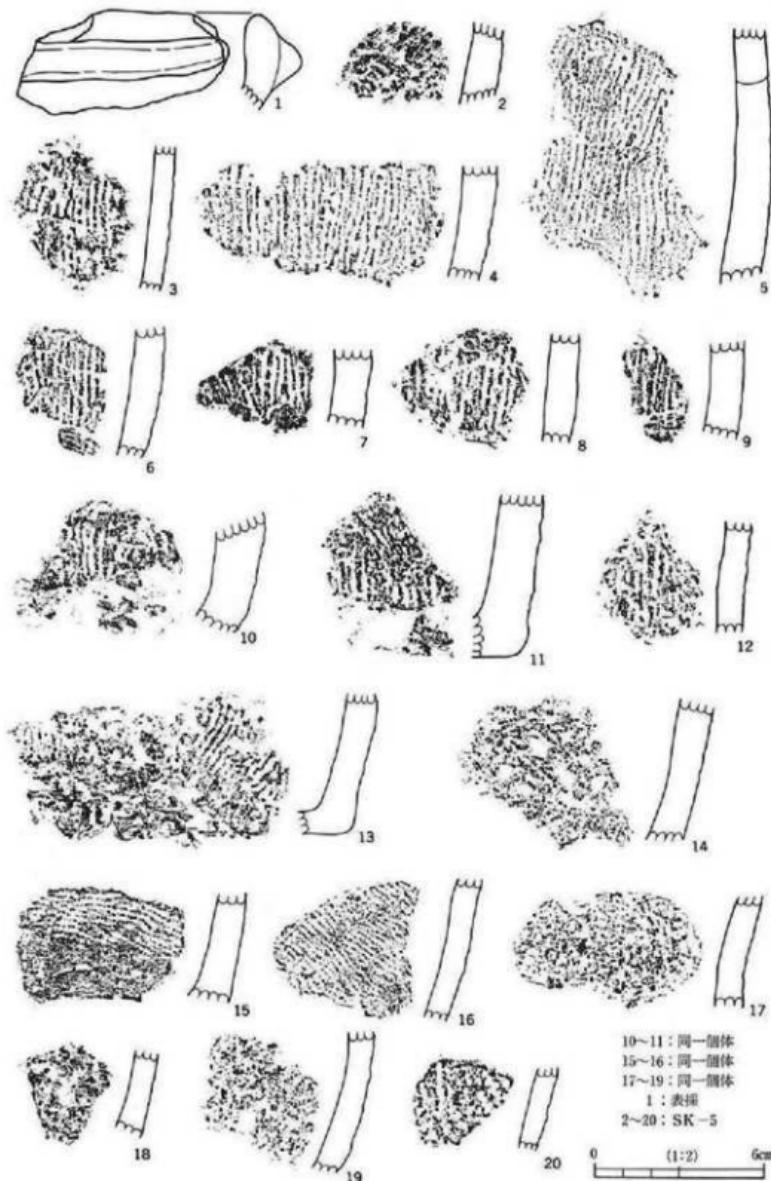
第5図-2～20は、同様にSK-5からの出土で、遺構覆土が1層のみの人为的な埋土と考えられるため、前述の異形土器と同一層からの出土である。そのため、同じく後期初頭に比定できるものであろう。2は網目状撚糸文が器面に対して斜方向に回転施文された土器である。間隔を開けながら軸に対して横方向に撚糸を巻き、その間を軸の縦方向に平行するように撚糸で結んだ原体によるものである。器面の傷みが著しいため、撚りの方向は確認できない。

3～12は縦位の撚糸文が施文される土器群である。ほとんどが胴部資料であるが、11には底端部が認められる。なお、10・11は同一個体のものである。

13～20は器面に縄文が施される土器群である。15・16および17～19がそれぞれ同一個体のものである。撚糸文の施されるものと同様に、ほとんどが胴部の資料であるが、唯一15には底端部が認められる。すべて深鉢であると思われるが、詳細な形式(器形)などについては不明である。



第4図 田塚山遺跡群B地区遺構分布図



第5圖 田塚山遺跡群B地区出土遺物

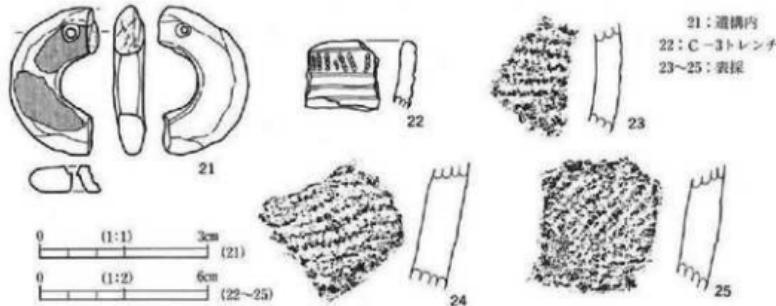
(4) C 地区の遺構と遺物

比較的広い平坦面を有し、遺跡が存在するとすれば縄文集落が想定可能な地区であった。本地区的調査対象面積は約2,400m²、設定したトレンチはC-1~5の5本で、面積は計317.7m²となり、調査対象面積に対して13.2%を試掘調査した。

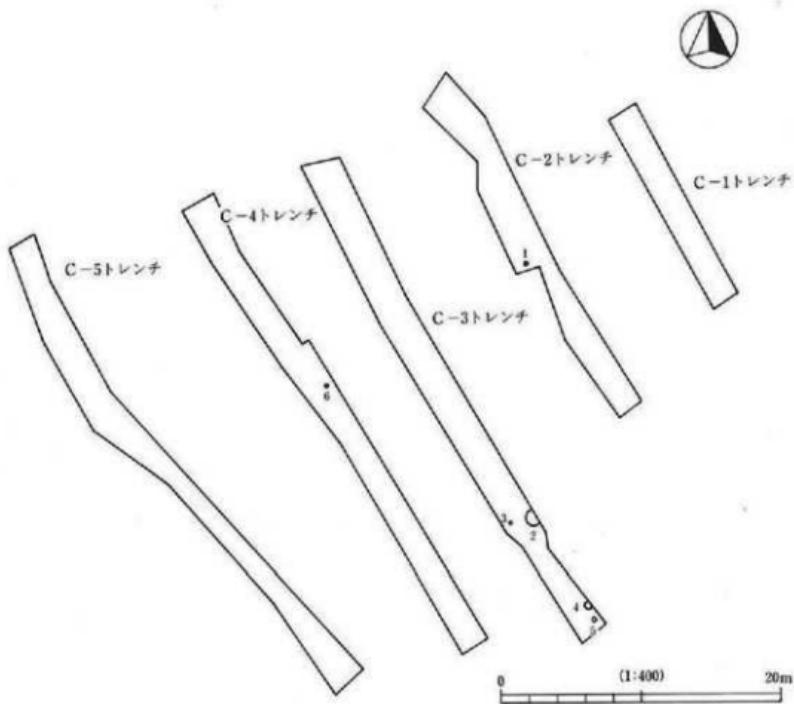
C-1・5トレンチには落ち込みが認められなかつたが、C-2トレンチから1基、C-3トレンチから2基、C-4トレンチから1基の計6基の落ち込みが検出された。C-3トレンチから検出された落ち込みは、トレンチ内の南側に集中していた。これらすべてを半截し、土層などの観察を行つたが、大きい落ち込み2基は攪乱と木根痕であった。また、直径20cmほどの小規模のピット4基は、深度10~15cmほどと比較的浅く、集落に伴う柱穴などとは判断できず、性格は不明である。これらの所属時期についても、遺物を伴わなかつたため不明とせざるをえない。しかし、本地区から表採などによって検出された土器から、縄文時代に位置付けられる可能性が高いものと思われる。

本地区からは縄文土器が表採されたほか、遺構内から勾玉も出土している。

第6図-21は遺構内出土の勾玉で、分析結果から滑石製と判明した。上部右側の先端をわずかに欠いており、全体的にやや荒い研磨調整が加えられている。一方、整形、穿孔は比較的丁寧で、整った勾玉状に製作されている。穿孔は裏面側から施され、表面の貫通の際に生じた貫通剥離も丁寧に研磨されている。孔の断面は、一方に片寄った段違いの砂時計のような形状を呈している。土器を伴わないと時期不明であるが、少なくとも縄文時代の範疇で捉えられるものであろう。強いて言うならば、本地区からは縄文時代中期前半の土器群が検出されているため、勾玉もこの時期に所属する可能性があるものと思われる。しかし、隣接するB地区からは中期後葉～後期前葉に比定される土器の出土が認められるため、明確な位置付けを行うには不確定な要素が多い。なお、田塚山遺跡群から出土した遺物の中で、石器類はこの勾玉1点だけであり、いわゆる生活道具としての機能を有する石器類は確認されなかつた。



第6図 田塚山遺跡群C地区出土遺物



第7図 田塚山遺跡群C地区遺構分布図

22はC-3トレンチから出土した土器で、縄文時代中期初頭に比定されるものである。口縁は直立し、口唇部は平坦である。口縁部にR Lの短縄文を回転施文し、その上下に細い半截竹管状工具によって、断面カマボコ状の平行沈線文を数条描出している。口唇部には、施文時に生じた平行沈線の痕が、器面調整によって磨消されていることが確認できる。

23~25は本地区から表採された縄文土器である。3点とも器面に縄文が施されるのみであるため、明確な時期は不明であるが、胎土の観察から概ね中期前半に属するものと思われる。23はR Lの縄文が施されるもので、胎土は暗橙褐色を呈する。24はL Rの縄文が施文される資料である。胎土の色調は淡橙褐色を呈している。25にはL Rの縄文が施され、胎土は淡橙褐色を呈する。破片上部は器面に対して横方向に縄文が回転施文されているが、下部では右上から左下に向って斜方向に施されている。これらはいずれも深鉢の胴部破片である。表採資料であるが、本地区の主要時期を示唆しているものと思われる。

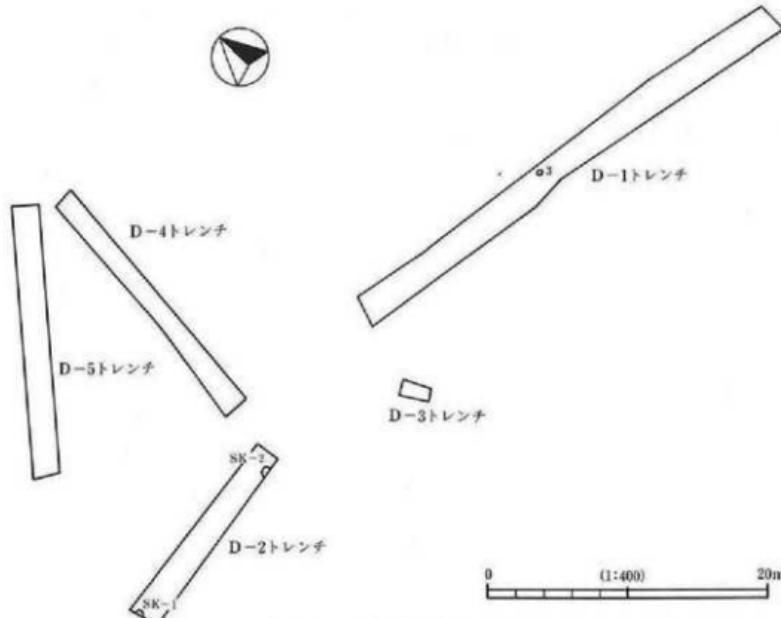
(5) D地区の遺構と遺物

本地区も、地形的に縄文集落の存在が当初から想定されていた。今回の調査対象面積は約1,500m²である。それに対して、トレンチをD-1～5までの5本設定し、179.1m²を試掘調査した。調査対象面積に対する試掘調査面積の比率は、11.9%である。

試掘調査時には、D-3～5トレンチから落ち込みなどの確認はできず、D-1・2トレンチから焼土遺構1基と木根痕と考えられる落ち込みが2基の計3基が検出されただけである。遺物の出土は1点も認められなかった。しかし、表土剥ぎ後の補足調査においては、土器片を伴うピット複数が検出されている。

焼土遺構は直径約60cm、深度約25cmの比較的小規模な土壤で、焼土と木炭粉が多量に認められた。また、遺構覆土の下半から、平均8cm×5cmほどの楕円形を呈する扁平な川原石が検出された。これらの川原石は、破片を含むと総数14点で、そのすべてが部分的に赤化している。土器を伴わないことから所属時期は不明であるが、縄文時代とするのは疑問で、少なくとも中世以降のものと考えられる。おそらく、近世頃に位置付けるのが妥当であろう。

なお、D-3トレンチは旧道脇の地形が盛り上がった部分を断ち割りしたものである。ここは塚の可能性があったが、表土が薄く、自然地形と判断されるものであった。



第8図 田塚山遺跡群D地区遺構分布図

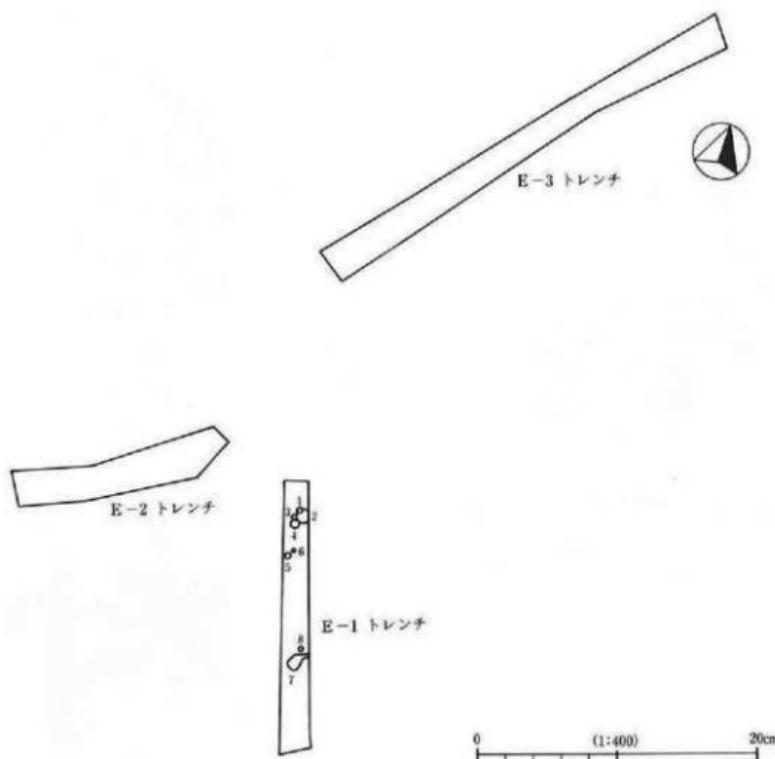
(6) E 地区の遺構と遺物

本地区も、地形的な状況から縄文遺跡が想定されていた。調査対象面積は約1,000m²であるが、伐採木が集積されていたため、本地区内にはトレンチを2本しか設定できなかった。試掘調査面積は74.5m²で、比率は7.5%である。また、補足的にD地区と本地区との間にE-3トレンチを設定した。

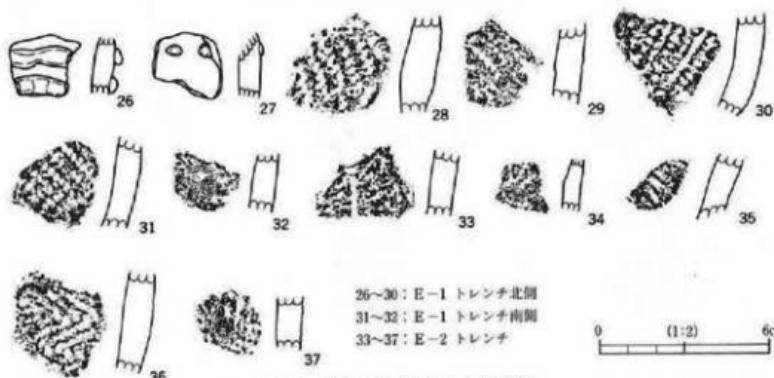
落ち込みなどが確認されたのはE-1トレンチのみで、E-2・3トレンチからは検出されなかった。E-1トレンチで確認された落ち込みについては、その大半を半截したが、木根痕と考えられる底面不整形のもので占められ、確実に遺構と判断することができるものは検出されなかった。

第10図-26~30は、E-1トレンチ東側から出土した縄文土器である。26は器面に幅約0.6cmの粘土紐を貼付けた土器である。粘土紐は貼付けたまま未調整のもので、上下が交互に指頭で押さえられ、緩い波状を呈している。胎土の観察などから、前期後半に位置付けられるものと思われ、文様の特徴から蜆ヶ森I式に比定される可能性もある。27は小さく扁平な粘土貼付文が施文される資料である。28はRLの斜行縄文が器面に施されるもので、29・30も同様にRLの縄文が施文される。27~30は、胎土から前期後半~中期初頭に位置付けられるものである。31・32はE-1トレンチ南側より検出された資料である。31には、RLとLRの縄文を交互に施文した羽状縄文が施され、縄文時代前期後半に比定されるものである。32は無文土器で、器面が比較的丁寧に研磨調整されているという特徴があるが、時期については不明である。33~37はE-2トレンチから検出された土器である。33・34・35は、3点ともにLRの斜行縄文が施される資料である。胎土から、縄文前期後半~中期初頭に比定されるものであろう。36はRLとLRの縄文を交互に施文した羽状縄文の資料で、前期後半のものである。37は縱位撚糸文(L)が施されるものであるが、時期は不明である。

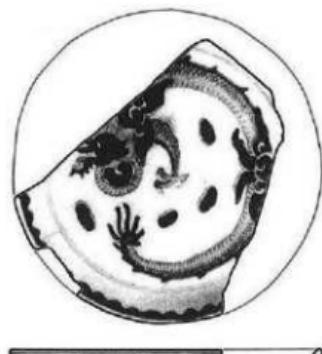
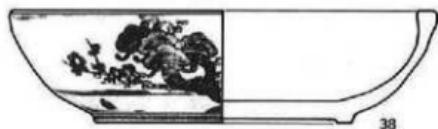
第11図は本地区から検出された近代の遺物である。38は口径約23cm、器高約4.5cmの肥前系と思われる皿である。型を使用しコバルトによって発色させる手法のいわゆる“ペロ藍”と呼ばれる製品で、内面にその特徴ともいえる文様が重なり合った部分が認められる。口縁は厚く、口唇部は平坦で、内面と同一の型を使って同時に文様が施されたもので、底部内面には木葉を組み合わせた文様が施されている。39は肥前系の染付皿である。内面に竜が描かれるほか、口縁内面には波型の装飾がみられる。底裏には「福」の字を四角く開いた『角福』の銘が記されている。38は近代のものと思われ、39については近世まで遡る可能性がある。40は「八幡屋」という現存する酒屋で使われていた徳利である。酒類などを量り売りするための“貸し徳利”あるいは“通い徳利”であり、昭和10年代頃まで使用されていたものと思われる。41には「村山」の文字がみられ、40に類似した徳利である。40に比べ、若干大型のものである。本地区からは、ここに示したものはかにも近代の遺物がいくつか検出されているが、すべてこれらのような日常生活雑器であった。



第9図 田塚山遺跡群E地区遺構分布図



第10図 田塚山遺跡群E地区出土遺物(1)



39



41



40

第11図 田塚山遺跡群E地区出土遺物(2)



(7) F・G・H地区の概要

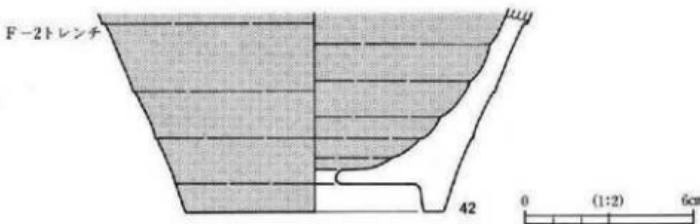
これらの調査地区は「田塙山」の中心から外れたところに位置している。調査対象面積も他の調査地区よりも小さく、3地区の調査対象面積は、当初計2,600m²程が予定されていた。これは全調査対象面積の約21.7%を占める。

F地区は丘陵主体部から離れた尾根先端付近の小さな独立丘である。上面は平坦であるが狭く、調査対象面積は約1,000m²であった。トレンチは4本設定し、172.5m²、17.3%を試掘調査したが、遺構と判断できるものはみられなかった。F-4トレンチの中央部北壁側に不整形の落ち込みが検出されたが、木根痕と思われ、この他に遺構などはみられなかった。遺物は表土中から近現代のものと考えられる陶器の底部が1点出土したのみである(第12図-42)。これはロクロ成形のものであり、外面だけでなく内面にも施釉されていることから、口縁があまりすぼまらない甕であると思われる。底部のはば中心には、二次的に使用されたことを窺わせる穿孔が施されている。

G地区は、地形的には南側に開いた沢内の沖積地である。調査対象面積は約1,200m²であるが、その半分が沼状の休耕田で、伐採後の木材が集積されていたこともあり、調査可能な面積は限られていた。結局2本のトレンチを設定し、24.2m²を発掘した。その比率は2.0%である。試掘トレンチには、沢内に堆積した黒色土が認められたが、遺物はなく、遺構が構築されるような状況ではなかった。

H地区はG地区の南方の沖積部分に設定された調査区である。盛土による宅地造成がなされた約400m²を対象としたが、G地区に遺跡が存在する可能性が認められなかつたため、調査対象から除外した。

実際に調査を行ったF・G地区では、遺構と判断できるものは認められず、また遺物も表土中から近代のものが1点出土したのみであった。時間的制約や現場の状況などから実際の調査面積が限定されてしまった部分があるが、G地区の地山面の傾斜は急であり、湿地性の堆積粘土層が確認されたことから、居住に関わる遺跡の立地条件にそぐわないといえる。これらのことから、G・H地区には遺跡の範囲は及ばなかったものと判断した。



第12図 田塙山遺跡群F地区出土遺物

4 繩文時代と田塚山遺跡群

今回の試掘調査によって、田塚山遺跡群の主要時期は縄文時代前期後半～後期初頭であることが確認された。そして各地区毎に時期差が認められ、概してB地区は後期初頭、C地区は中期初頭、E地区は前期後半であるということができるものであった。

本遺跡群は、地理的・地形的には、現在の鯖石川の約1km余り西方に位置し、小児石遺跡〔柏崎市教委1991〕にも近接している。そのため、漁撈や陥入穴獣との関わりが想定され、比較的広い平坦面であることからも、集落を営む条件を具备していると思われる。しかし、今回の試掘調査では遺構・遺物ともに比較的希薄であり、少なくともある程度の規模をもつ集落は営まれなかつたと判断せざるをえない結果となった。検出された遺構もB地区SK-5に墓坑の可能性が考えられるのみで、住居跡や炉跡など定住生活を営んだ痕跡と思われるものは確認できなかつた。また、出土遺物も同様な傾向を示しており、土器小破片のはかは異形土器や勾玉などやや特殊なものが検出されたのみで、いわゆる生活道具としての石器類や石器の製作・加工痕跡を示唆するフレーク類はまったく確認することができなかつたのである。

このような特殊性を挙げると、①住居跡・貯蔵穴など集落を構成する上での主要な遺構を作らずに、墓坑のみが単基で検出されたこと。②単基で検出された墓坑から、管見資料には類例のみられない異形土器が出土したこと。③その他の土器は、ほとんどがいわゆる粗製土器の小破片であること。④石器類は勾玉が1点検出されただけで、生活必需品としての石器が確認されなかつたこと。⑤その場所での石器製作・加工を示唆するフレーク類の出土がみられなかつたこと、などがある。

本遺跡群は地区毎に時期が異なるため一律に意味付けることはできないが、このような特殊性を積極的に理解しようとするならば、縄文遺跡の形成あるいは遺跡のあり方といった問題にかかるものとして重要であるといえる。遺構の分布状況からは、狩猟や漁撈あるいは採集時の衛星施設（いわゆるキャンプ・サイト）的な地であったことがまず考えられるが、前述したように狩猟などに用いる利器類の検出が認められないため、若干疑問が残る。当時は貴重であったであろう勾玉、そして単基の墓坑とそこから出土した類例のない異形土器などの遺物は、そこがキャンプ地などではなく、生活と密着した上で、ある特定の意味をもつ場所として崇められていたことを示唆しているように思われる。そのような意味において、本遺跡群は遺跡の形成やそのあり方といった問題の一端に迫れるものなのではなかろうか。

一応、今回確認された事実から本遺跡群の意義を述べたが、試掘調査の結果だけでは本遺跡群の性格を確定することは難しい。試掘比率は11.65%に過ぎず、今後実施が予定されている本調査によって、検出される遺構・遺物の様相が一変する可能性も秘めているからである。したがって、今回提示された諸問題を考慮して本調査を実施し、その結果に期待することしたい。その上で、当地域における他遺跡のあり方と照らしあわせて、本遺跡群の意義を再考することが必要であろう。

5 田塚山遺跡群B地区SK-5出土の異形土器について

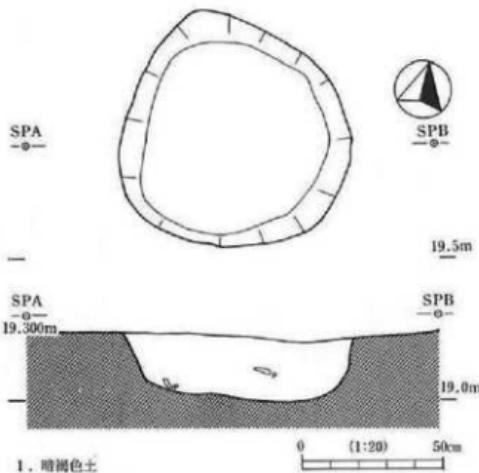
新潟県地方における縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての凸縫文の施される土器群に関しては、特に三十石場式土器様式の研究に関連して、様々な論考が行われてきた。今回の田塚山遺跡群の試掘調査によても、B地区SK-5から当該期に相当するものと思われる器面上部に凸縫文が、下部には縱位の撫糸文が施される土器（第14～15図・図版5）が検出された。これは、単に凸縫文が施されるということのみにとどまらず、管見資料には類例のみられない異形の土器である。この土器の特異性は一見して認識されるものであろうことから、今回この土器の検討を行うこととした。

(I) 異形土器の出土状況

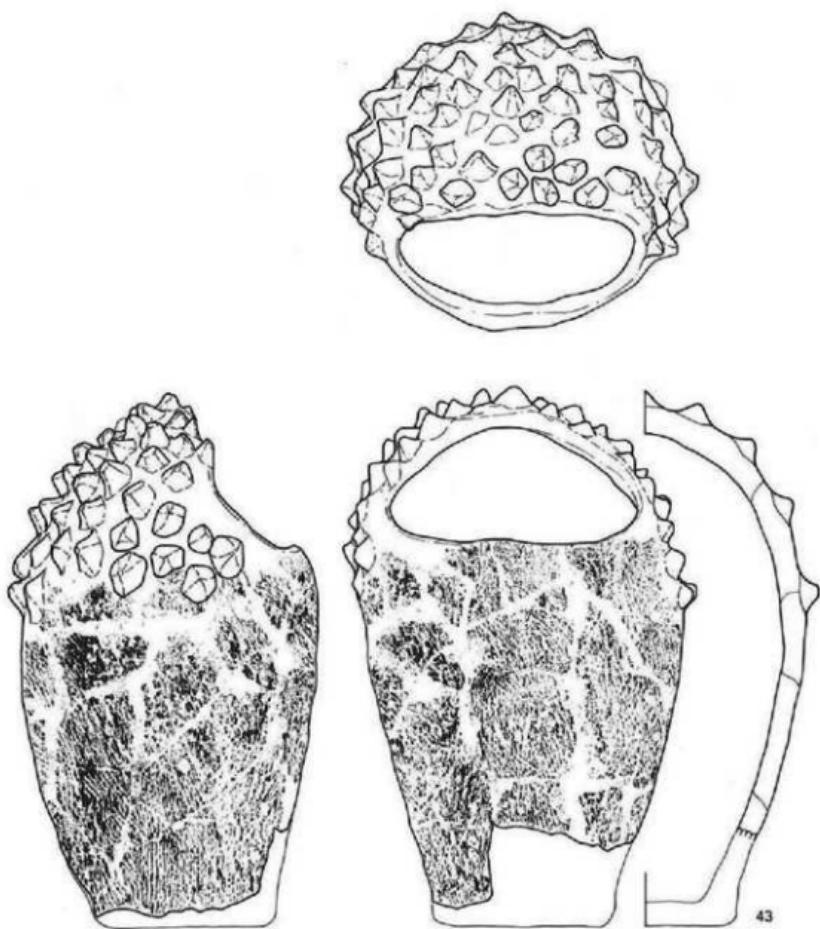
当該資料の出土したB地区SK-5（第13図・図版2-a～e）はB-4トレンチの南側から検出された。確認面での平面形は、長軸約86cm、短軸約82cmの円形である。また、確認面の標高は約19.3m、確認面からの深度は約22cmで、遺構覆土は観察の結果分層できず、第1層のみであった。色調は暗褐色を呈し、粘性・しまりともあり、 $\#0.1\sim20mm$ 程度の炭化物粒子を少量、 $\#0.1\sim0.3mm$ 程度の焼土粒子を微量に含む。包含物の混ざり方などから推測して、人為的な埋土であると考えられる。本

遺構の性格については、決定的な確証には欠けるものの、平面の規模・遺物の出土状況・覆土が人為的な埋土と考えられることなどから墓坑である可能性があると思われる。

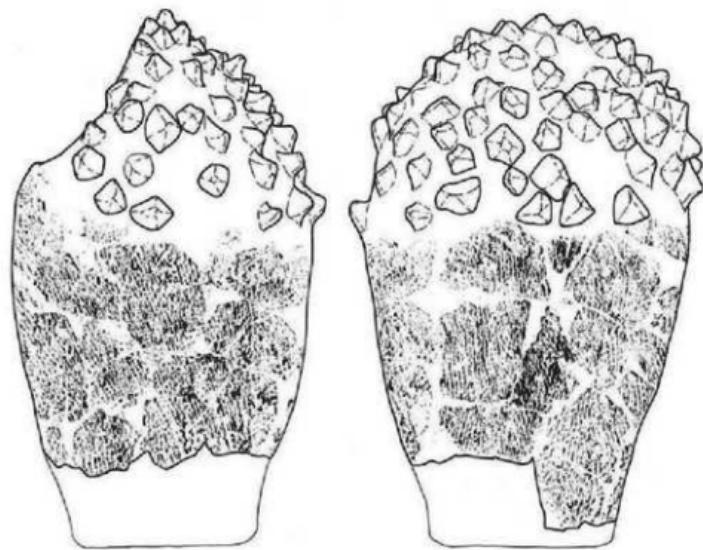
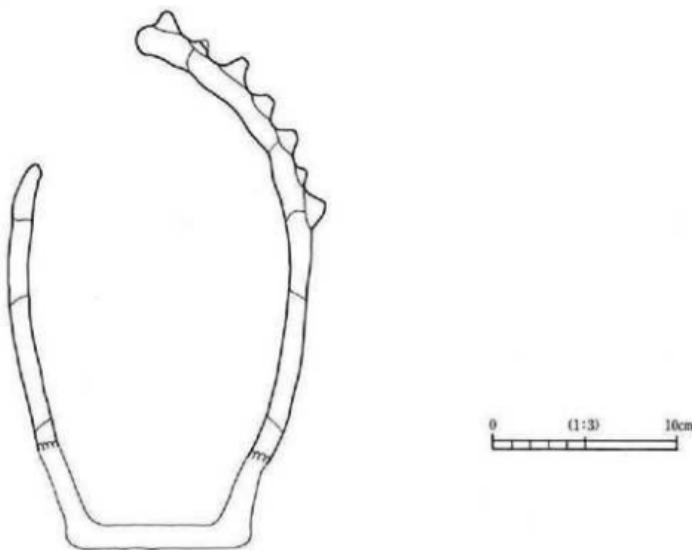
異形土器は本遺構の北西隅から検出され、遺構確認面においてすでに上端部が露出し、若干上から押し潰されているような状態ではあったが、ほぼ原形をとどめていた。また、口縁部を上面に、底部を下にしながらも正立ではなく、開口部分が真上に向かうように斜めの状態で検出された。その際、後述で便宜的に正面とした面は遺構の内側を向き、同様に背面とした面は遺構の外側を向いていた。



第13図 田塚山遺跡群B地区SK-5平面・断面図



第14図 田塚山遺跡群B地区 SK-5 出土土器(1)



第15圖 田塚山遺跡群B地区SK-5出土土器(2)

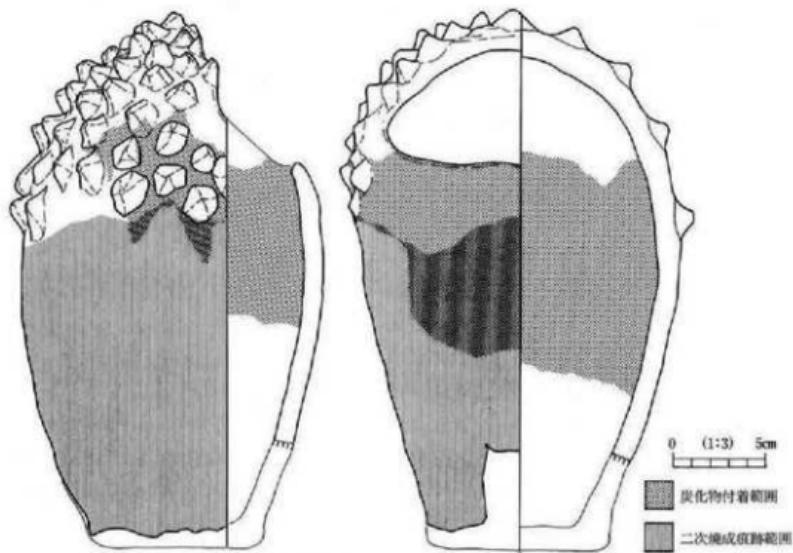
(2) 異形土器の観察

当該資料は、胴上部に最大径をもち、底部に向かって胴下半が直線状にすぼまり、口縁部の片側はやや内湾している。しかし、もう片方は内湾した口縁部がそのまま伸びてドーム状となっている。いわば、弥生時代後期にみられる手培形土器を胴長にしたかのような形式の土器である。開口部は片側にのみ認められ、強い正面性が窺われる。そのため、ここでは便宜的に開口部のみられる側を正面、その反対側を背面とするとともに、ドーム状に伸びた口縁を口縁A、通常の深鉢の口縁に相当する方を口縁Bと呼称することとした。

この土器は、ほぼ完形であるにもかかわらず、わずかに底部内面端部が認められるのみで底部自体は検出されなかった。そのため、底部は故意に抜かれている可能性がある。器高は残存部が27.9cmで推定では約29cm、胴部最大径は19.2cm、底部径は推定で約10cmである。また、口縁Aは厚さ15mmの丸味をもった肥厚口縁で、口縁Bは厚さ9mmの内傾した平坦な口縁である。

文様は、ドーム状部分のはば一面に凸縮分がランダムに施され、口縁Bから底部にいたるまでの器面全体に縦位撲糸文(R)が施文されている。凸縮文は断面三角形状で、直径平均約2.0cm、高さ平均約1.5cmのやや大形のものが貼付けによって施されている。また、口縁Bの位置より下にまで凸縮文が施されているにもかかわらず、正面にはみられない。そのため、施文される文様の種類が正面と背面とで異なり、形式からだけでなく文様からも正面性を知ることができる。しかし、これは形式によって正面が決定されたとともに、その正面性によって凸縮文の施文範囲が規制された結果によるものとも考えられる。撲糸文は正面の中心付近では口縁Bの約0.5cm下から施文されるが、側面に近づくと口縁B直下から施されるようになる。側面および背面では、口縁Bの位置よりも下で凸縮文間に撲糸文の痕跡が認められるところから、凸縮文が貼付けられるよりも前に撲糸文が施文されたことがわかる。

口縁部付近の輪積み痕の位置を観察すると、口縁Bの約3.4cm下、口縁Bとはほぼ同じ高さ、さらにドーム状の部分にもいくつか認められる。内面には幅7.5mm程度の器面調整痕がほぼ全面に観察できるが、口縁Bとはほぼ同じ高さの輪積み痕を挟む上下で顕著な差異が認められる。すなわち、その部分よりも下位では内面調整痕の深さが0.1~0.3mm程度であるのに対し、その上位では深さが0.3~3.0mm程度とより深くなるのである。また、口縁Bの内面直下には、粘土が若干盛り上がっているのが認められ、これは口縁B以下とドーム状部分との接合を補強するために、ドーム状部分の内面調整時に寄せられたものであると思われる。以上のこととは、器面調整時に口縁Bの位置を挟む上下で、粘土の乾燥程度に相違があったことに起因するのではないか。よって、当該資料は口縁Bの高さまで粘土を積み上げた後短時間乾燥させ、その後再び粘土を積み上げてドーム状部分を作っていくという手法によって製作されたものと考えられる。なお、側面・背面の凸縮文は最下部のものでも口縁Bから約3.9cm下にあり、口縁Bとドーム状部分の接合部のみでなく、口縁Bの約3.4cm下の輪積み部分までを補強するかのように施されている。このことから、凸縮文の施文範囲は形式だけではなく、土器の製作手法によ



第16図 田塚山遺跡群B地区SK-5出土土器 炭化物・二次焼成範囲

っても規定された可能性があるのではないかと思われる。

次に当該資料に付着した炭化物の範囲と二次焼成痕跡の範囲を観察すると、第16図に示したようになる。炭化物は口縁部に近くなるほど付着量が多くなり、逆に底部にいくほど二次焼成痕跡が強くなっている。したがって、この土器は正立状態で使用されていたものと考えられ、機能はおそらく煮沸用であったと推測される。

(3) 異形土器の考察

当該資料に施される凸瘤文は比較的大形であり、正面には施されないが、その独特の効果は正面からも充分に確認できるものである。それは他文様を置換しても得られない効果であると思われ、凸瘤文独自の文様効果であるといえよう。

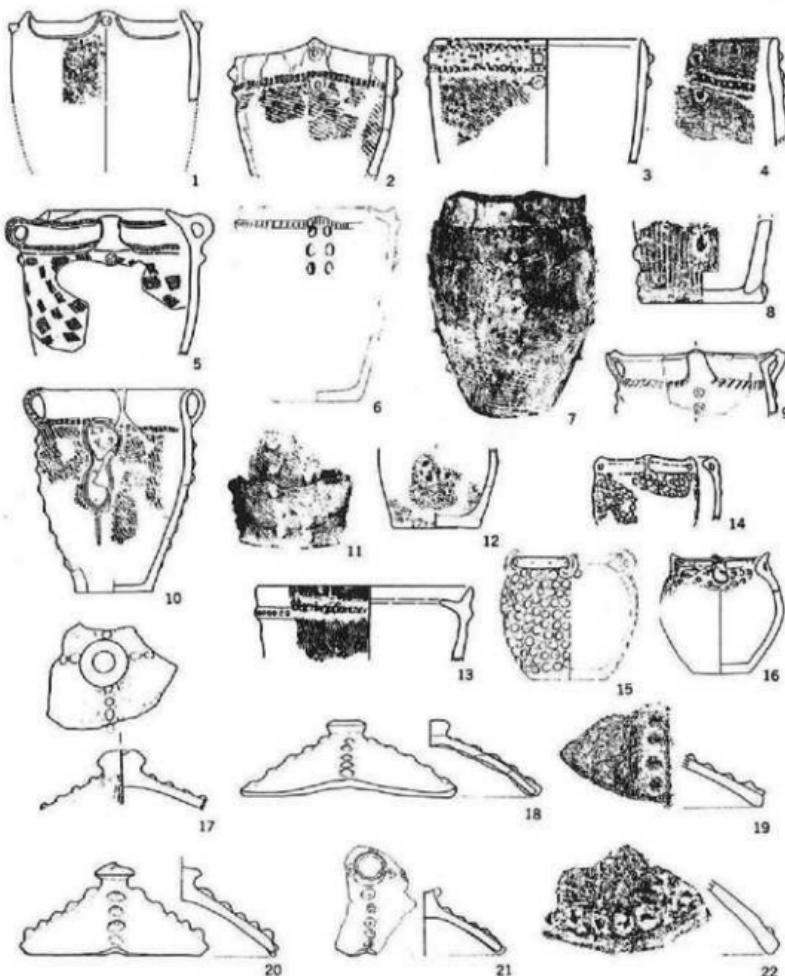
縄文時代中期末葉から後期初頭の凸瘤文の施される土器群は、施文部位の文様の性格・意味などから、簡易的に①口縁部あるいは頸部に、1~2個で器面に4単位施されるもの（第17図-1~5）、②胸部に器面を4分割するように、縦列状に施されるもの（第17図-6~12）、③胸部全面にランダムに施されるもの（第17図-14~16）、④蓋に施されるもの（第17図-17~22）の4種に分類することができる。当該資料は③と同様に凸瘤文がランダムに施されているが、③の管見資料がすべて胸部に配されているのに対し、当該資料は器面上部のドーム状部分に施されている点が大きく異なる。当該期にはすべての文様に意味付けがなされており、その

種類とそれが施されるべき部位が既に規定されていたものと考えられるため、この相違点は重要なであろう。一方、口縁に施されるものは①に認められるが、口縁部を4分割するための要素が強く、当該資料と直接関連付けることはできない。文様の性格・意味がまったく異なるからである。また、口縁よりも上に凸縞文が配されるものとして着目されるのは、④のように蓋に施文されるものである。④はさらに蓋の頂上部から縁辺部に向って直列状に施されるものと、蓋の縁辺部に沿って施されるものとに細分可能であるが、いずれも①同様に区画文としての要素が強い。そのため、なぜ独特の文様効果を有する凸縞文が、胴部ではなく器面上部のドーム状部分にランダム施文されたのかという疑問が生じるのである。

管見資料から上述の疑問に対する説明を試みると、以下の2通りのことが考えられる。その1は、①の口縁が上方に伸び、口縁部に施される凸縞文がドーム状部分に残るとともに、③に影響されて一面ランダムに施文されたとする考え方であり、①の中には当該資料のように口縁部に凸縞文が、胴部に撲糸文が施される資料もみられる(第17図-1)。その際には、形式によって正面性が打ち出されたため、口縁を4分割する意味は失われ、正面には凸縞文が配されなかったものと理解したい。その2は、蓋に施される凸縞文が③の影響で一面ランダムに施文されたとする考え方である。すなわち、当該期のいわゆる粗製深鉢土器の中には蓋受け状の内耳があるものが認められ(第17図-13)、このような深鉢に④のような蓋が被せられている姿から、当該資料の文様配置が決定されたとも考えられるのである。その際、蓋受け状の内耳や蓋のつまみは機能面で形式にかかわる次元のものであるため、異形土器となった段階で消失したものとして理解したい。いずれにしても、当該土器に認められる文様の配置は管見資料にはみられないものであり、今後の類似資料の出土に期待したい。

凸縞文と撲糸文を同一個体に施文する手法は比較的中末葉に多くみられるが、後期初頭にも存在し、それだけでは編年的指標となり得ない。したがって、凸縞文を一面ランダムに施す手法に留意し、第17図-14~16の土器に比定させた上で、三十稻場式土器様式の前段階に位置付けたい。この段階は、三十稻場式の直前段階[田中1989・1990]・城之腰VI1期[新潟県教委1991]・多賀屋敷編年第4段階[佐藤・石坂1993]のそれぞれに相当するものと考える。該期を中末葉とするか後期初頭とするかについては、良好な共伴資料が乏しいため流動的ではあるものの、田中耕作[1990]と同様に称名寺1式の古段階に比定させたいと考えている。そのため、三十稻場式土器様式の前段階ではあるが、当該資料を後期初頭に位置付けたい。

時代指標としての時期区分は、各地域ごとに行うのではなく、全国画一的に行う必要がある。当該期においては、学的に称名寺式土器様式の成立をもって後期の始まりとするのが妥当であろう。該期の県内土器群には、多分に大木10式からの系譜を引くと思われるものが認められ、そのような意味では“中期的、な様相であるといえる。八幡一郎[1928]は「一の普遍化に到達する期間を一の相と呼ぶ。」と述べているが、この概念は様式の前後関係[中野1992]だけでなく、時期区分の次元における他地域との比較にも適用できると思われる。該期県内の土器様相はこの「相(phase)」によって説明できる可能性があるのではないかろうか。



- 1 柏崎市野崎遺跡
 3・13 柏崎市久保田遺跡
 7・11 長岡市三十帖場遺跡
 17 柏崎市劍野D遺跡
 2・4・8～10・12・18～21 小千谷市城之腰遺跡
 5 見附市耳取遺跡
 14 福島県郡山市馬場中野遺跡
 22 越路町多賀屋敷遺跡
 6・15 松之山町黒倉十文字遺跡
 16 大和町水上遺跡
 (縮尺不同)
- (各遺跡発掘調査報告書のほか、柏崎市史編さん委1987、谷藤・間根1990、長岡市1992より転載)

第17図 繩文時代中期末葉～後期初頭の凸縦文施文土器群

III 青海川東部丘陵地区

1 調査に至る経緯

今回試掘調査の対象となった（仮称）柏崎コレクションビレッジの建設事業は、柏崎市の市政施行50周年記念事業の一環として構想されたものであった。昭和63年12月には、コレクションビレッジ建設研究委員会が発足し、同事業推進懇談会小委員会がこれまで行ってきた構想研究を引き継ぎ、より具体的な調査・研究に着手していた。本事業の大まかな概要とは、平成4年度用地取得・造成計画、平成5年度ボーリング・造成・建築設計、平成6年度建設とし、平成7年度7月オープンというスケジュールが組まれていた。展示館は3館が予定され、展示館総面積1,590m²、敷地面積28,117m²、造成面積14,800m²であった。

当該事業と埋蔵文化財の取扱協議がもたれたのは、平成5年になってからのことであった。造成区域内においては、周知の遺跡は未発見であったが、事業地に南接する尾根下からは鉄滓

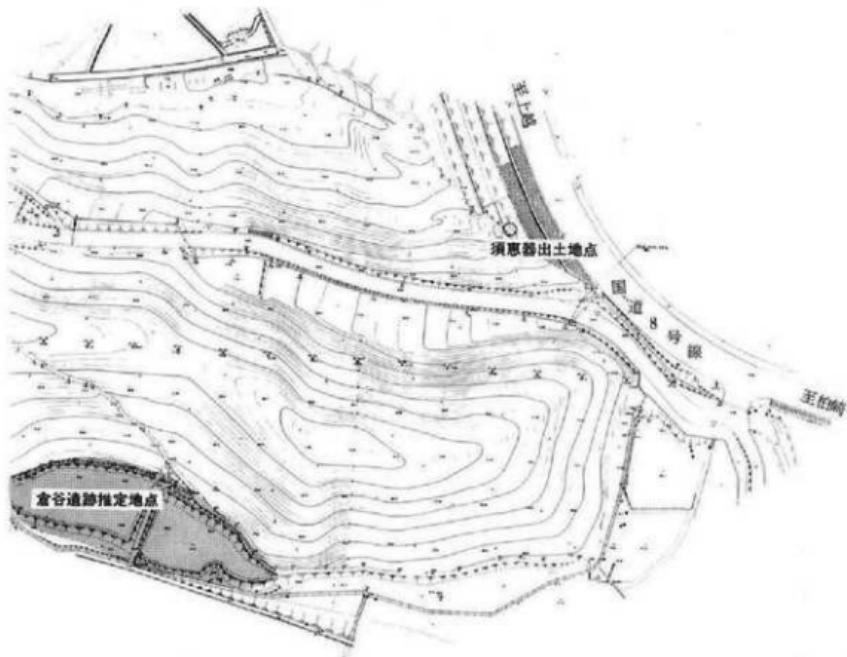


第18図 (仮称) 柏崎コレクションビレッジ建設用地内の地形と隣接遺跡

や製鉄炉壁が採集され、製鉄遺跡の存在がほぼ確定的となっていた。このため、事前に試掘調査が必要との判断がなされ、事業者である柏崎市経済部地域振興室に対し、その旨が伝えられていたのである。しかし、試掘調査の日程が組めない状況下、本事業は事業計画通りに工事を着手していたことが平成5年9月に明らかとなり、市教委は9月30日現地にてこの事実を確認した。この事実は、市役所関係部局及び県教委に伝えられ、造成工事については一部の危険防止作業等を除き、直ちに中止となった。しかし、現場は赤土が露出し、この状態のままでは二次災害の懼れがあったことから、県教委と協議し早急に試掘調査を実施することとなった。ただし、市教委では日程調整が付かず、余裕もまったく無かったことから、試掘調査は県教委の主導のもと、平成5年10月6日に実施した。なお、調査は、当日1日で終了した。

2 試掘調査の概要と調査結果

造成区域の地形は、細長い沢と尾根上の平坦地に大きく2分できる。区域内は一部造成がなされており、沢内の盛土は厚いところもあったが、調査地点ではおおよその調査が可能であった。しかし、これらの盛土除去には大型重機が必要と判断されたことから、調査の方法は、バ





第19回 事業計画とトレンチの位置

ック・ホウ (0.7m) 1台による任意のトレンチ発掘とした。沢内においては、製鉄炉の構築に適した地形は1カ所であったことから、3本のトレンチを集中的に入れた。また尾根上平坦地については幅が狭いことから長いトレンチ1本で状況を把握することとした。沢内は、3本とも地山面以下まで発掘したが、焼土や木炭など製鉄に関わりそうな状況は確認できなかった。また尾根上平坦地でも、縄文土器等の出土もなく、また柱穴1基も確認されなかった。以上の調査結果から、当該地には遺跡は営まれていなかったと判断された。

3 古代の青海川地区

青海川地区において現在確認されている遺跡は、ダルマ岩製塩遺跡〔品田1989〕と倉谷遺跡〔品田1993〕とした鉄滓出土遺跡の2箇所のみである。ダルマ岩製塩遺跡は、遺跡名の如く塩を生産していた遺跡であり、倉谷遺跡は採集された遺物から製鉄遺跡とすることができる。両者は、古代に営まれたと考えられ、ともに工業系の生産関連遺跡であった。以下、両遺跡を概観した後、近世における青海川地区の経済的な基盤について検討を試み、古代における青海川地区の意味あるいは意義に触れてみたい。

(1) 青海川地区における古代の遺跡

地形概観 柏崎平野西部の地形は、米山山塊が海岸まで張り出し、急峻な断崖をもって日本海に面している。海岸部は、低位・中位・高位の各段丘が発達する。沖積地は、山塊から流れ落ちる中小の河川流域にわずかに認められるが、非常に少ないと当該地域の特徴である。河川では、谷根川がもっとも大きく、次いで鯨波・川内地区的前川が掲げられるが、概して急流で水量が多い。谷根川は、米山の北麓にある谷根盆地で小河川が集約され、一筋の川となつて青海川地区へ北流している。

青海川地区的集落は、谷根川の河口付近を中心にまとまりを見せる。本地区の東西は、段丘・丘陵を隔て、西側に笠島地区、東側には鯨波地区が位置することになる。試掘調査の対象となった区域は、青海川地区でも谷根川右岸に所在する。当該区域は、標高が70～90mほどをなす丘陵となるが、高位段丘もしくはこれに接する丘陵に相当するものと考えられる。このような地形は海岸線まで続き、高いところでは70m余りの断崖となっている。段丘は、幾つかの小さな沢によって標高で30～40mまで開析されているが、これらの沢の規模は概して小さく、沖積地は大変狭くなっている。

ダルマ岩製塩遺跡 本遺跡は、通称ダルマ岩の背後に形成された小さな入江状の海岸急斜面に営まれていた。現状は標石海岸で、波打ち際から10mほどで崖斜面に至るが、製塩跡は標石の上面から2mほどの高さまで、何枚かの層に分かれて形成されていた。製塩が行われた地層は、大きく4枚が確認でき、各々明褐色～褐色土の間層を挟み、包含層内は薄い互層状態が観察される。層内には、焼土や木炭が多量に含まれていた。製塩土器は、細かな破片となって散乱し、製塩層最上部には黒く煤が付着した礫が層をなす箇所も認められる。この礫群については、石敷きの製塩炉等の可能性が指摘されている。当該製塩跡の時期については、中世に至る鉄鋸によって煎熬がなされること、本遺跡では製塩土器により煎熬がなされていること、底部の形態からすれば新しい傾向が看取されることから、概ね平安時代と推定しておきたい。

倉谷遺跡 本遺跡は、細長い沢の中程に位置する。沢の両側斜面は概して急を呈するが、本遺跡が立地すると推定される地点は、比較的緩やかとなっている。本沢内では、この他に製鉄関連の遺構を構築できる地形が見当たらないことから、当該地点を推定した。現状は水田で、

斜面をカット、盛土して造成がなされていることが窺える。遺物は、おそらくこの造成中に出土したと思われるが、具体的な出土地点は明確でない。出土遺物は、鉄矛と製鉄炉の壁である。穴沢義功氏のご教示によれば、炉壁の観察から堅型炉の炉壁と考えられる。したがって、時期的には、9世紀以降であり、古代と考えられることから、概ね平安時代と推定しておきたい。

(2) 近世における開発と産業

耕地の開発 現在の青海川地区における水田分布を見ると、谷根川河口を中心とした狭い河川流域と、左岸の岩野台地に主な分布域があり、その他には小さな沢毎に若干の水田を見ることができる。岩野台地は中位段丘であり、今その平坦地の大半が水田として開発されている。その規模は、東西約200m、南北およそ500mと広く、その面積はおよそ10町歩に及ぶものである。しかし、この岩野台地一帯が開発されたのは、それはほど古くなかったようである。

青海川における田畠は、天和3年(1683)の『青海河村畠山屋敷野帳』[柏崎市史編さん委1984b]によれば、水田は2町6反5畝5歩、畑方は1町4反4畝1歩、屋敷は1反1畝9歩で、田畠屋敷を合わせて4町2反15歩であった。本地区の山は21町8反2畝9歩があったとされており、全体に占める耕地・屋敷の比率は約16.2%でしかない。なお、山には施肥に供された切替畑が2町2反2畝9歩含まれている。以上は、本村分の面積であるが、新田分として水田3町6反2畝4歩、畑3町1反8畝4歩、田畠合わせて6町8反8歩の耕地が検地されている。この新田開発は、万治3年(1660)の『青海川村新田検地帳』[柏崎市史編さん委1984a]に載せられる田畠合わせた6町4反5畝18歩の新田のことと考えられる。当時の水田は、3町2反7畝9歩、畑が3町1反8畝9歩で、水田が3反5畝ほど、また畑では5歩ほどの増加があるが、ほぼ同じ面積となっている。

上記二つの検地帳に記載された小字名と、現在の青海川地区の小字名とを対比して、若干の状況を判断してみよう。本村の水田は、谷根川流域を中心に、丘陵内の沢に形成された小規模な沖積地が主な開発地となっていた。これに対し、新田部分として開発された区域は、小字名の分布からすると谷根川左岸の岩野台地と判断でき、岩野台地における新田開発は、17世紀前半代を中心になされたと考えることができよう。『青海川村新田検地帳』に記載された土地所有者は、6町5反ほどの田畠全てが八木七兵衛の所有となっており、七兵衛の開発に

本村屋敷所有者名	新田所有者名
次左衛門	○
庄三郎	○
秀兵衛	○
豊重郎	○
作左衛門	○
惣左衛門	○
作兵衛	○
吉郎右衛門	○
森左衛門	○
惣三郎	○
伝吉	○
門三郎	○
藤右衛門	○
清右衛門	○
九兵衛	○
太右衛門	○
次右衛門	○
庄左衛門	○
孫兵衛	○
庄吉	○
五郎右衛門	○
庄兵衛	○
平兵衛	○
太左衛門	○
多右衛門	
八兵衛	
源七	
六兵衛	
庄右衛門	
徳左衛門	
勘七	
清左衛門	
次郎右衛門	
源七郎	
宗三郎	
平助	

第1表 青海川本村・新田土地所有者対比表

なるものと考えられる。岩野台地の南端には、「七兵衛割」という小字名があり、開発者の名残りと/orすることができる。

ところで、天和3年、青海

川村には24軒の人家があつた。文獻年間(1582~1596)に実施された『頸城郡文獻檢地帳』[中頸城群教育会編1940]によれば、4軒21人の人口があつたとされており、90年程の間に軒数が6倍に急増している。八木七兵衛が開発した新田の土地所有者をみると、天和3年の検地段階には青海川本村の住人とほとんど重複しており、この新田が青海川村の農業基盤を安定させ、村の発展に大きな役割を果たしたことが明かである。以上のことから、青海川村において、農地の開発が進められたのは17世紀になってからであり、16世紀以前の農業生産は低かったことを示していくことができる。

漁業と農業 本地区は、沿岸部に所在することから、その産業・経済基盤は農業以外に漁業という側面も考慮する必要があろう。そこで、少し近世の漁業について概観しておきたい。柏崎市域の沿岸部において、近世にも漁村であったと考えられる地区は、磯崎村の笠島を含め、7カ村を知ることができる。しかし、

大字青海川小字地名	青海川村田畠山野原地帳(天和3年)	本村(切替地)	同村新田	青海川村新田領地帳(万治3年)
本村(アカイワ) 佐波(ナガオモチ) キモノ 下ノ浜(シモノハマ) スゲ田(スゲノミ) 山ノ沢(タノシラ) 食谷(エタタニ) シナ山(シナヤマ) 櫛ヶ瀬(チルガサ) 平瀬(ヒラガサ) カムツ 安ノ上(イニノウニ) 林口(リンドウ) 林口(ハツシダケ) 林木平(ナシキヤイタ) 足見(チヨウカミ) 足見(アンカミ) 水谷(ミズタニ) 舟子(コロコリ) 小舟(コロコロ) 三日曲割(シカベニワリ) 古宮(フルイワ) 王子外(ドソト)	長表○ わかされ 食谷田 たるさみち 安ふち○ 林口○ なしの太平 長くうわん	向田 木谷 小舟 古宮	中野 中野 中野 中野	上野原土手外 岩野原土手外 さか鶴川土手外 上野七丁外 小鶴土手外
向田(ムカイダ) 中野(ナカノ) 上ノ浜(ウヌノハマ) 土手サキ(ドテサキ) 東大割(ヒガシオオワツ) 東大割(ヒガシオオワツ) 堤ノワキ(カマシオワキ) 金山(カナナツ) 行坂(ギョウカキ) 向山(ムカイヤマ) 南池(フマイチ) 小字川(コヨリツ) 平田ヶ谷(ヒラタガタニ) 松ヶ崎(マツガザキ)	○ 金山 行坂 向山 面進 平田谷 松ヶ崎	向山 面進 平田谷 松ヶ崎	中野 中野 中野 中野	岩野原土手外 さか鶴川土手外 上野七丁外 小鶴土手外
さか鶴川 すね田 中表 坂下 坂上 ひがい ひら橋 木口 沢田 酒木田駅 ささ坂 ささ坂駅 井戸川 へった谷 沼野谷 くり山 いせめ 方ノ口 船岡 田原口 かみとれ	○ 太鼓坂 垂木坂	太鼓坂 垂木坂	むかい	松ヶ崎
上野原 つつみ下 金山根 上 中野	上野原 つつみ下 金山根 上 中野	宮土 土橋	宮土 土橋	中野 若ノ原中嶋 中嶋道下 中嶋宮ノ上 中嶋土橋 見ノ原土橋
上原 上原原野	上原 上原原野			見ノ原三番 見ノ原道下 十王堂屋敷 白山上ノ平 白山

第2表 青海川地区小字対比表



1. ダルマ岩製塙遺跡
2. 倉谷遺跡
3. (仮称)柏崎コレクション
ビレッジ調査点

地名：現小字名



沿岸部にあって、漁業に関する資料が発見されない地域も4カ村ほど数えられるが、実はこの中に青海川村が含まれている〔高橋1990〕。ただし、沿岸にあってまったく海の幸を漁しなかったと言うわけではない。青海川村の海産物には、鮭・煮海鼠・干鮑・鱧鰯が記録されており、食膳に供されるものなど多少の採集はなされていたようである〔高橋前掲〕。しかし、延亨3年（1746）の『鉢崎組村鑑帳写』〔柏崎市史編さん委1985a〕には「当村之儀農業之外何ニ而も稼無御座候」とあり〔高橋前掲〕、また天保6年（1835）の『地浜依物他所者諸負稼容免願』〔柏崎市史編さん委1985b〕にも「私共村方地引網を以て觸重にいたし、沖釣漁等不仕農業重ニ仕来、……」とあって、基本的には農業を基盤とした村であったとすることができよう。

以上のことから、この青海川地区においては、農業が基本的な経済基盤であったことは明かであり、この他の産業は從とすることができる。そして、農業の基盤がある程度安定したのは、谷根川左岸の岩野台地が開発された17世紀前半代以降であり、その後に近世における青海川地区の発展があったと考えることができるようである。

（3）古代の青海川地区について

前項において、近世における青海川村の概況を窺ったが、これを直ちに古代の状況とするには急ぎすぎる。特に、本村分の田畠が天和3年段階で4町余りあること、万治3年段階で新田分のみ検地されているなど、本村分の存在は明かである。また文録年間には家数4軒、繩高4石9斗6升7合とあり、水田等が16世紀末までにある程度開発されていたことは事実である。しかし、16世紀末段階における村の収穫量が5石に満たないということは、これから換算される水田面積もかなり狭いとせざるを得ない。もっとも中世においては、「かたあらし」あるいは荒田として収穫されない田畠の存在も考えられることから、中世までの水田等の面積を具体的に知ることはできない。しかし、近世において農業基盤が整備され、農業が主産業となつたこと、笠島のような港に恵まれず漁業の基地とはなり得なかつたことを勘案すれば、農業も漁業も余り期待されるほどの生産力はなかつたと思われる。また、当該地一帯は、検地帳等で頸城群下美守郷と記載しているように、頸城郡の東端にあった。古代美守郷の中心は、柿崎町木崎城跡周辺と考えられること、地形的にも耕地の開発に適しておらず、当時の郷数からして人口密度が概して希薄なことからすれば、少なくとも農業に依存した開発はほとんどなされなかつたのではないだろうか。以上のことから、本地域における古代の開発等は、少なくとも16世紀末段階の状況を上回るものではないと判断したい。

青海川地区で発見された2遺跡のすべてが、農業関連の遺跡ではなく、ともに塩・鉄といった手工業系の遺跡であることは、本地域の一つの地域性、あるいは独自性とすることができる。今後の検討はさらに必要であろうが、本地域における古代は、農業を主産業とはせず、地理的な環境を最大限に利用して、塩と鉄を生産する工業地帯だったと考えたい。

IV 総 括

本年度第Ⅲ期とした市内遺跡発掘調査は、田塚山遺跡群と青海川東部丘陵地区の2地区を対象とした。両地区はともに周知の遺跡が未発見であったが、地形の状況や隣接遺跡との関連から、前者は縄文集落、後者は古代の鉄生産に関連した遺跡の存在が想定された。今回の試掘・確認調査は、このような事由により実施したものであるが、以下に調査の結果について総括を行い、今後の課題等を述べまとめてみたい。

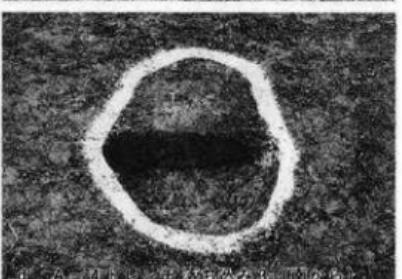
田塚山遺跡群は、沖積地の中央に浮かぶ独立丘であるが、上面の平坦部は概して広く、集落を営むには無理のない条件を備えていた。しかし、今回の試掘調査及びC・D両地区的表土剥離結果を見ると、遺構密度が薄く、少なくとも一定規模に達する集落は営まれていなかったと判断できる。検出された遺構を見ると、ピットと土壙を主体とする。しかし、住居ができる柱穴の並びは把握できず、また炉址も未検出である。検出された土壙の一部を発掘したが、出土遺物は異形土器や勾玉など、やや特殊な状況が窺える。今回の調査結果では、本遺跡群の性格付けは難しく、また各地区毎に時期差があるなど一律な評価はできないが、一応広義の集落と考え、今後実施が予定されている本調査に期待することとしたい。

青海川東部丘陵地区については、今回の対象区域内に遺跡の形成は認められなかった。しかし、本文でも検討したように、当該地一帯は非農業系の産業、特に鉄生産や塩生産の関連遺跡が分布しており、地理的条件に即した遺跡形成があったと考えられる。本地区的古代遺跡は、今後の課題が多いが、手工業系の遺跡を視点に本地区的古代史を考えていきたい。

〈引用・参考文献〉

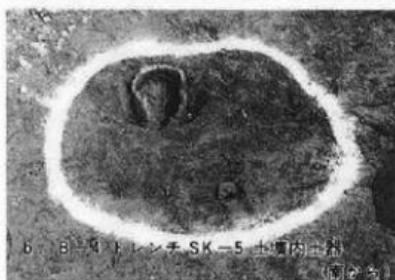
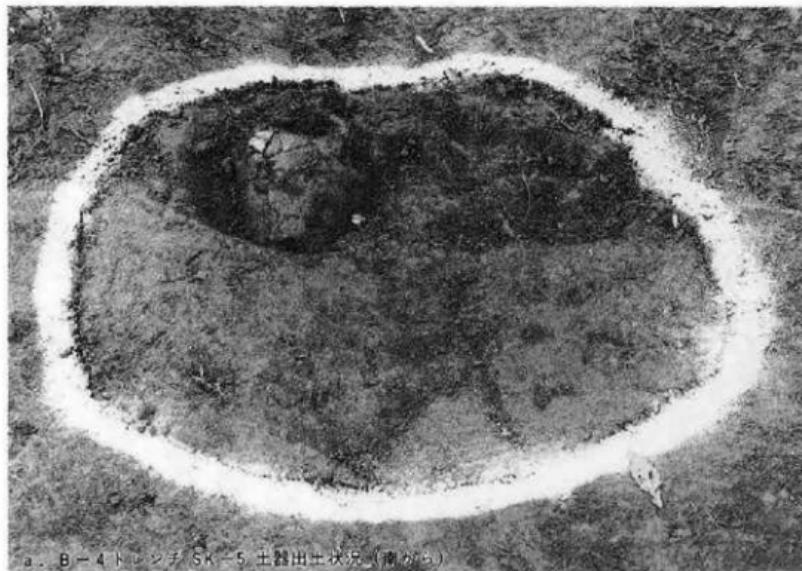
- 柏崎市教育委員会 1991『小児石』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15)
柏崎市史編さん委員会編 1984a『柏崎の近世史料(支配・税地)』(柏崎市史資料集近世篇1上) 柏崎市
柏崎市史編さん委員会編 1984b『柏崎の近世史料(天和地帳)』(柏崎市史資料集近世篇1下) 柏崎市
柏崎市史編さん委員会編 1985a『柏崎の近世史料(貢租・町村概況)』(柏崎市史資料集近世篇2上) 柏崎市
柏崎市史編さん委員会編 1985b『柏崎の近世史料(産業・騒動・交通)』(柏崎市史資料集近世篇2下) 柏崎市
柏崎市史編さん委員会編 1987『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市史資料集考古篇1) 柏崎市
柏崎市史編さん委員会編 1990『柏崎市史』 柏崎市
佐藤雅一・石坂主介 1993『調査中期後葉から後期前葉への土器変遷試論』『多賀屋敷遺跡第二次発掘調査報告書』(越路町文化財報告書第20) 越路町教育委員会
品田高志 1989『柏崎・刈羽の古代土器製造』(柏崎市立博物館館報) No.3 柏崎市立博物館
品田高志 1993『柏崎平野の古代鉄生産遺跡-藤橋東遺跡群の発見とその意義-』『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
高橋義昭 1990『漁村と渔民』『柏崎市史』中巻 柏崎市
田中耕作 1988『三十稻場式土器様式』『縄文土器大観』第4巻 小学館
田中耕作 1990『三十稻場式土器研究の現状と課題』『新潟考古学談話会会報』第5号 新潟考古学談話会
谷藤保志・岡根慎二編 1990『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
中頃城郡教育会編 1939『中頃城郡誌』第1巻
中野純 1992『豊式』に関する一般理論とその展望』『新潟考古学談話会会報』第9号 新潟考古学談話会
長岡市編 1992『長岡市史』(資料編1考古)』
新潟県教育委員会 1991『関越自動車道関係発掘調査報告書(城之腰遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集)
八幡一郎 1928『遺物遺跡に基づく相概念の提唱』『南佐久郡の考古学的調査』岡書院

田塚山遺跡群 1



図版 2

田塚山遺跡群 2



b. B-4 トレンチ SK-5 土壙内一部
南から



c. B-4 トレンチ SK-5 土器の凸瘤部分
北から

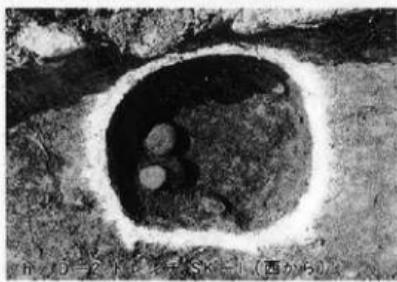
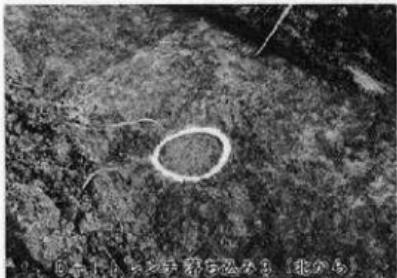


d. B-4 トレンチ SK-5 土壙 (南から)



e. B-4 トレンチ SK-5 被覆 (南から)

田塚山遺跡群 3



図版 4

田塚山遺跡群 4



図版 4-A 地区全体（東から）



図版 4-B E-1-1トマツ木（北から）



図版 4-C 地区全体（南から）



図版 4-D E-1-1トマツ木（西から）



図版 4-E 地区全体（西から）



図版 4-F E-1-1トマツ木（北から）

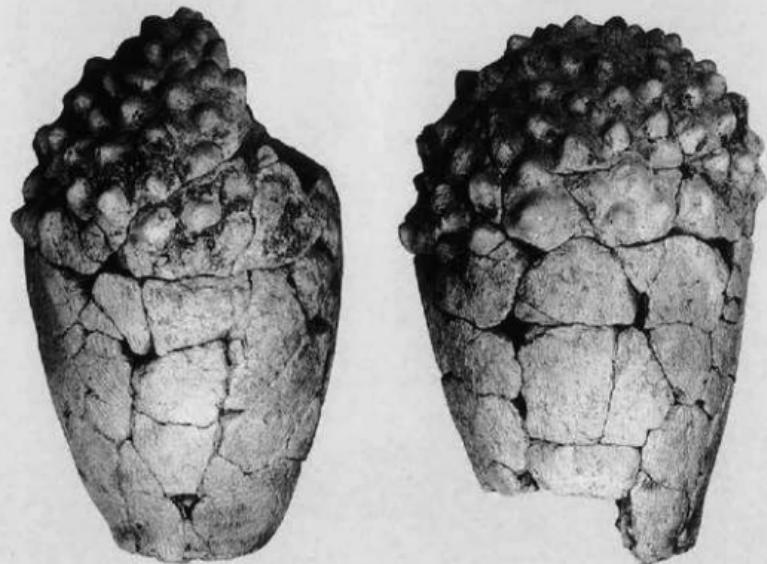
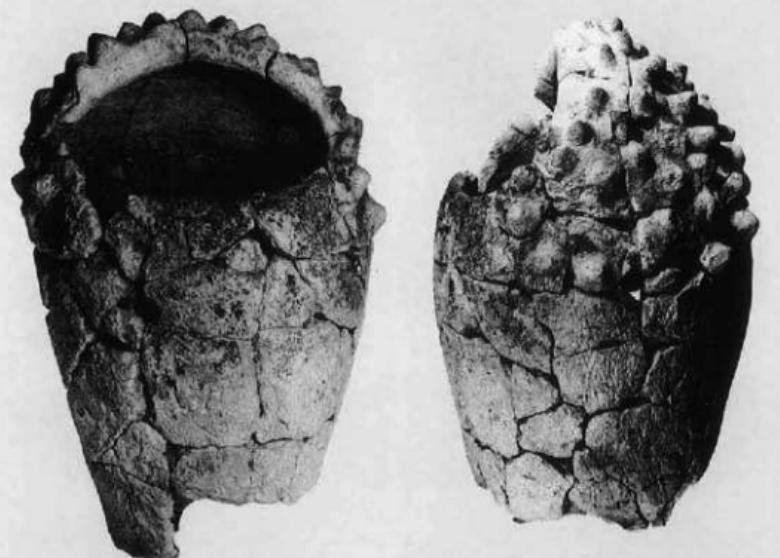


図版 4-G 地区全体（西から）



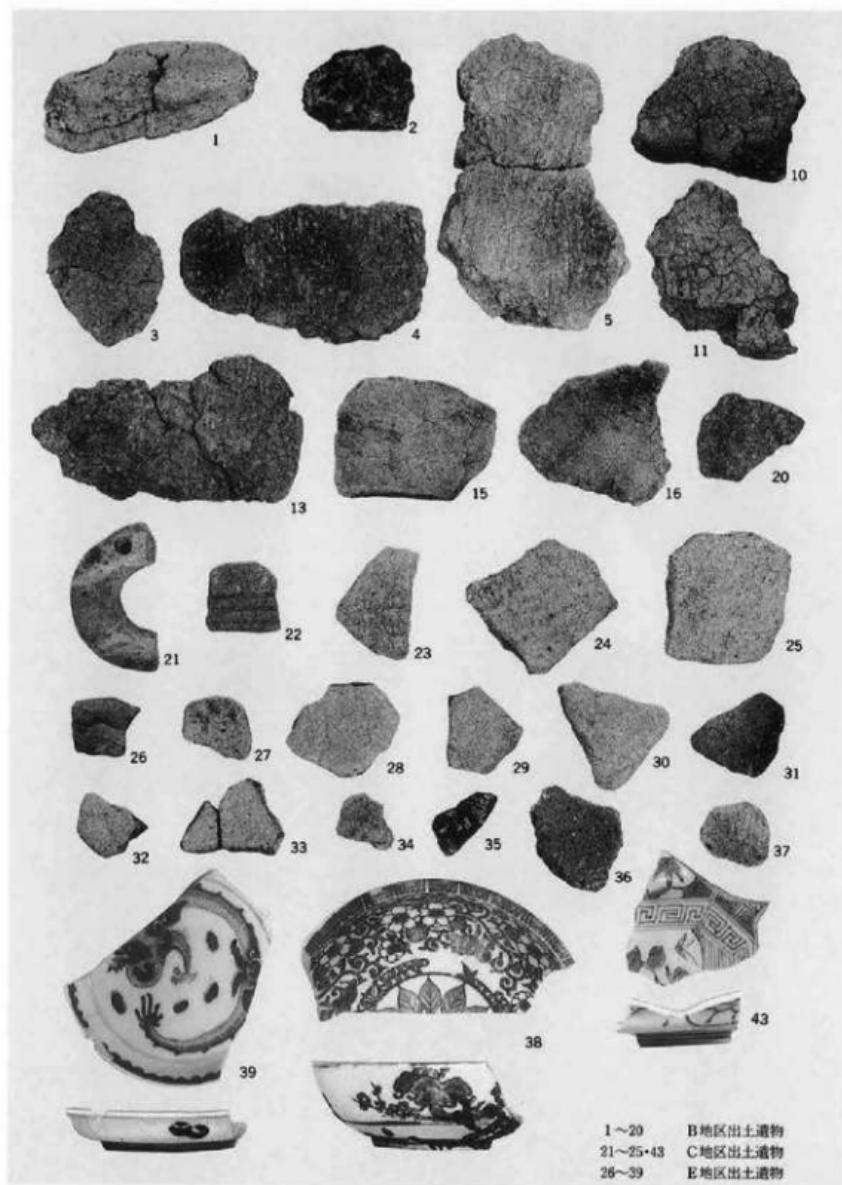
図版 4-H E-1-1トマツ木（南から）

田塚山遺跡群 5



B 地区 SK-5 出土土器 (S=1/3)

田塚山遺跡群 6



1~20 B地区出土遺物
21~25・43 C地区出土遺物
26~39 E地区出土遺物

青海川東部丘陵 1



第 1 図 ドリッヂホッパー車



第 2 図 ドリッヂ



第 3 図 ドリッヂ



第 4 図 ドリッヂ

図版 8

青海川東部丘陵 2



a. 第1トレーンチ発掘風景



b. 第2トレーンチ発掘風景



c. 第3トレーンチ



d. 第4トレーンチ

報告書抄録

ふりがな 書名	かしわざきしのいせき 3 柏崎市の遺跡 Ⅲ							
調査名	柏崎市における各種開発に伴う試掘・確認調査の報告							
卷次	Ⅲ							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	品田高志・中野純・小山田夕実							
編集機関	柏崎市教育委員会 社会教育課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	〒945 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL 0257-21-2364							
発行年月日	西暦 1994年3月31日							
ふりがな 所取道路	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 道路番号	北 緯 東 經	測定時間	調査面積 m ²	調査原因		
田坂山遺跡群 青海川東部丘陵	新潟県柏崎市 内田尻・藤井・ 美日地区 青海川	15205 15205	645 —	37度 21分 44秒 37度 20分 40秒	138度 35分 35秒 138度 29分 41秒	1993年4月～ 1993年12月 1993年6月	1397.5 288.0	宅地造成に 伴う試掘確 認調査 展示施設の 建設、熱線 測定調査
所取道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
田坂山遺跡群 青海川東部丘陵	集落跡	縄文時代 近代	土 器 石 器 骨 分 陶 器	土 器 石 器 骨 分 陶 器				

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第19集

柏崎市の遺跡 Ⅲ

—柏崎市における各種開発に伴う試掘・確認調査報告—

平成6年3月31日 印刷
平成6年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会
新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 三秀社